

研究紀要

第13号

1997

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

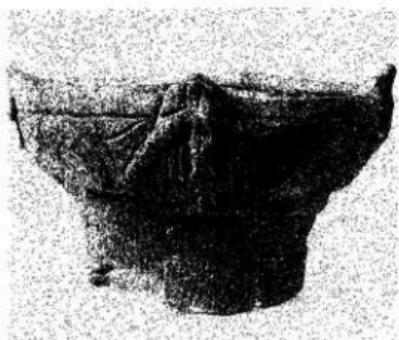
研 究 紀 要

第 13 号

1996

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

写真 1



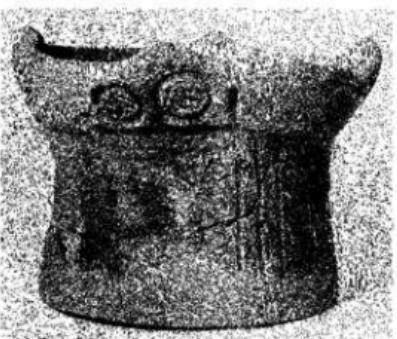
1 包含層



2 包含層



3 10号住居跡



4 9号住居跡



5 15号住居跡



6 包含層

写真 2



7 10号住居跡



8 10号住居跡



9 10号住居跡



10 包含層



11 3号住居跡



12 10B号住居跡

目 次

序

[論文]

- 川越市鶴ヶ丘遺跡C区の石器群 田中 英司 (1)
- 水窪遺跡の研究 谷井 彪 (13)
—加曾利E式土器の編年と曾利式の関係からみた地域性— 細田 勝
- 埼玉県内における柄鏡形住居跡の地域的様相 (1) 鈴木 秀雄 (67)
- 手焙形土器の研究 (2) 高橋 一夫 (85)
—伊勢湾・近江・北陸編—
- 馬鐸と馬鐸装馬形埴輪 中村 倉司 (141)
- 関東地方出土の古代權衡資料 福田 聖 (169)

手焙形土器の研究（2）

—伊勢湾・近江・北陸地方—

高橋一夫

要旨 手焙形土器についての研究は、継続的に基礎的研究が蓄積されているとはいえない。筆者はすでに、東国資料については「手焙形土器の研究（1）—東国編一」と題し、「琦賀地域文化の研究」（1996.3）に発表した。そこでは、東国資料を紹介するとともに全国編年、時期別分布図等を提示し、手焙形土器研究の意義と見通しを述べておいた。

今回は、研究の第2報で、標題にある地域の手焙形土器の基礎的資料を提示する。実際に資料を見てみると、意外に内面にススが付着していることが多く、手焙形土器の内部で火を燃やしたことにはほぼ間違いないとの実感を得た。また、その数は極めて少ないとから祭祀に使われたと推定されるが、祭祀の実体は不明のままである。

しかし、手焙形土器はいわゆる邪馬台国の時代に出現し、定型化した前方後円墳が出現する時期には消滅することから、大和政権成立までの激動の時代に存在した土器といえ、大和政権成立過程を解明する一助となるものと考えている。

今後、基礎的資料を提示することを主目的に、「畿内編」、「中国・四国・九州編」、「総括編」を発表する予定である。

はじめに

すでに「手焙形土器の研究（1）—東国編一」と題し、東国地方については発表したが（高橋1996）、今回は副題にあるように伊勢湾・近江・北陸地方を対象として手焙形土器の基礎的資料を提示し、若干の考察も加えてみたい。

1 基本的事項

前回の拙稿では「部位の名称」、「形態分類」、「時期区分」について記したが、本稿を読むにあたっても必要と考えるので、再度要約して掲載しておきたい。

（1）部位の名称（第1図）

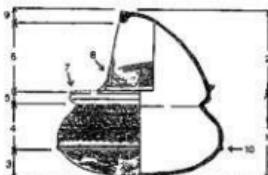
広面：面が器肉より広いもの

1類：面が器肉よ

りかなり広
いもの

2類：面が器肉よ
りやや広い
もの

狭面：面が器肉と



1	鉢部	6	開口部
2	覆部	7	口縁端部
3	底部	8	耳
4	体部	9	面
5	口縁部	10	突帯

第1図 部位名称図

同じ厚さのもの

また、面の形を次の3種類に分類する。

T型：面の中央部に覆部を接合しているため、その形態が「T」形をしているもの

上L型：面が上に広がるもの

下L型：面が下に広がるもの

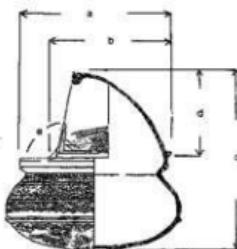
(2) 指数等 (第2図)

覆度指数：覆部接合幅 (b) ÷ 口径 (a) × 100

覆部高さ指数：覆部高さ (d) ÷ 器高 (c) × 100

覆部角度：鉢部口縁を水平とし、覆部接合部と而

天井部とを結んだ角度 (e)



第2図 指数等計測図

(3) 形態分類 (第3図)

鉢 部

A類：くの字状口縁を呈し、体部が内湾するもの

B類：受口状口縁を呈し、体部が内湾するもの

C類：くの字状口縁を呈するが、体部が外に開くもの

D類：鉢部と覆部が同時に形成されたもの

E類：外上方に直線的に開くもの

X類：その他の形態

接合方法

1類：口縁肩部に覆部を接合。

2類：口縁端部を残し覆部を接合。

3類：口縁端部に覆部を接合

4類：口縁全体に覆部を接合

(4) 時期区分

1期：弥生時代後期後半中頃～後半

2期：弥生時代終末

3期：庄内式期

4期：布留式期初頭

2 手培形土器と出土遺跡

愛知県

1 瓜郷遺跡（豊橋市・資料1）

包含層からの出土である。底部は平底、口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部に接合しているものと思われる。而は狭面でハケ整形だけである。体部にはクシ描き円弧文とその谷部に斜めの平行クシ描文が描かれ、刻み突帯がめぐる。覆度指数：79、高さ指数：40、角度：110、形態はA3類

	A類	B類	C類	D類	E類	X類
1 類						
2 類						
3 類						
4 類						

第3図

である（豊橋市教育委員会1963）。

2 郷中遺跡（豊中市・資料1）

土壌から单独で出土した。口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は狭面であるが、下L状を呈している。鉢部と覆部の接合部には耳がつく。また、覆部には粘土組痕がみられる（豊中市教育委員会1989）。

3 岩倉城跡（岩倉市・資料1）

溝からの出土である。刻みをもつ体部突帯の小片である。突帯には刻みが入れられている（松原隆治ほか1992）。

4 朝日遺跡（西春日井郡清州町・資料1～3）

朝日遺跡は弥生時代中期から後期にかけての大集落で、同時期の集落としては尾張地方最大規模を誇り、その規模は東西約1.4km、南北0.8kmで、面積は80万m²を測るといわれている。また、環濠をもつ防衛的集落としても有名で、環濠は中期前半に1回、中期末に1回、後期に2回掘削されている。濠外では逆茂木が検出されている。朝日遺跡は後期末には急速に衰退し、廻間I式前半で解体すると考えられている。手培形土器は15点出土している（愛知県教育委員会1982・石黒立人ほか1994）。

(1) は方形周溝基（SX192）からの出土である。底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は狭面で、面側面の接合部に刻みの入った耳をがつく。体部には刻み突帯があげぐる。ほぼ完形である。腹度指數：70、高さ指數：44、角度：120、形態はB3類である。

(2) は61A区溝1からの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は狭面で、耳は面側面の覆部につき、口縁部には刻みが入れられている。形態はB3類である。

(3) は包含層からの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。体部には刻み突帯があげぐる、口縁部も2段の刻みが入れられている。形態はB3類である。

(4) は溝366からの出土である。体部には突帯中央に沈線を引いているため、一見2本の突帯に見える突帯があげぐる（以下、二重突帯）。また、体部には平行クシ描文とクシ先刺突文が施されている。

(5) は溝177からの出土である。底部は平底、口縁は受口状口縁である。覆部は口縁全体に接合しており、接合部には突帯があげぐる。面は広面上L型2類である。面側面には耳の剥離痕が認められる。体部には突帯があげぐり、平行クシ描文と貝殻腹縁文が施されている。形態はB4類である。

(6) は61H区西溝V・VIからの出土である。口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、接合部には突帯があげぐる。体部の文様構成は(5)と類似し、平行クシ描文と貝殻腹縁文が施されている。形態はA3類である。

(7) は61H区東溝VIIからの出土である。口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、突帯をめぐらしている。面は狭面である。形態はA3類である。

なお、覆部内面にはスヌの付着が認められる。

(8) は61H区東溝VIIからの出土である。底部は平底、口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部に接合しているようである。ハケ整形痕のみで装飾はみられない。

(9) は61H 区東溝Vからの出土である。底部は丸底で鉢部は内済し、口縁は直行口縁で、口縁端部に覆部を接合している。接合部と体部には刻み突帯がめぐる。形態はD類である。

(10) は60A 区溝V・VIからの出土である。底部は平底、口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は狭面で、面は接合部付近で突出し広くなり、耳状を呈している。体部には刻みの入った突帯がめぐり、口縁部にも刻みが入れられている。ほぼ完形である。覆度指数：76、高さ指数：51、角度：95、形態はA3類である。

なお、覆部内面にはススの付着が認められる。

(11) は包含層からの出土である。口縁は短くわずかに外反し、覆部は口縁端部に接合している。文様等は一切みられない。形態はA3類である。

(12) は溝80からの出土である。底部は丸底で、体部は直行し、口縁はくの字状に大きく開く。覆部は口縁端部を残し接合している。面は狭面で刻みが入れられている。面は接合部付近で広がり、耳と同じ役割をしている。口縁部にも刻みが入れられている。完形品である。覆度指数：89、高さ指数：63、角度：100、形態はA2類である。

なお、覆部内面には全体的にススの付着が認められる。

(13) は溝289からの出土である。底部は丸底、体部は直行し、口縁端部に覆部を接合している。面は狭面である。一部に赤彩の痕跡がみられる。ほぼ完形である。覆度指数：88、高さ指数：58、角度：118、形態はD類である。

なお、面及び覆部内面にスス（油煙）の付着が認められる。

このほかに2点の手焙形土器が出土している。いずれも鉢部から覆部にかけてのもので、形態はA3類である。1点にはススの付着が認められる（注1）。

5 週間遺跡（西春日都清州町・資料3）

朝日遺跡と近い位置にある弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡で、住居跡75軒、前方後方形周溝墓を含め3基の周溝墓がなどが調査されている。本遺跡からは2点の手焙形土器が出土している（赤塚次郎1990）。

(1) は土壇50からの出土である。土壇からは手焙形土器とともに高坏20点、壺11点、器台2点、鉢1点と手づくね土器が出土した。また、土壇は4号方形周溝墓に近接していることから、特殊な性格をもつ土壇ではなかったかと考えられている。

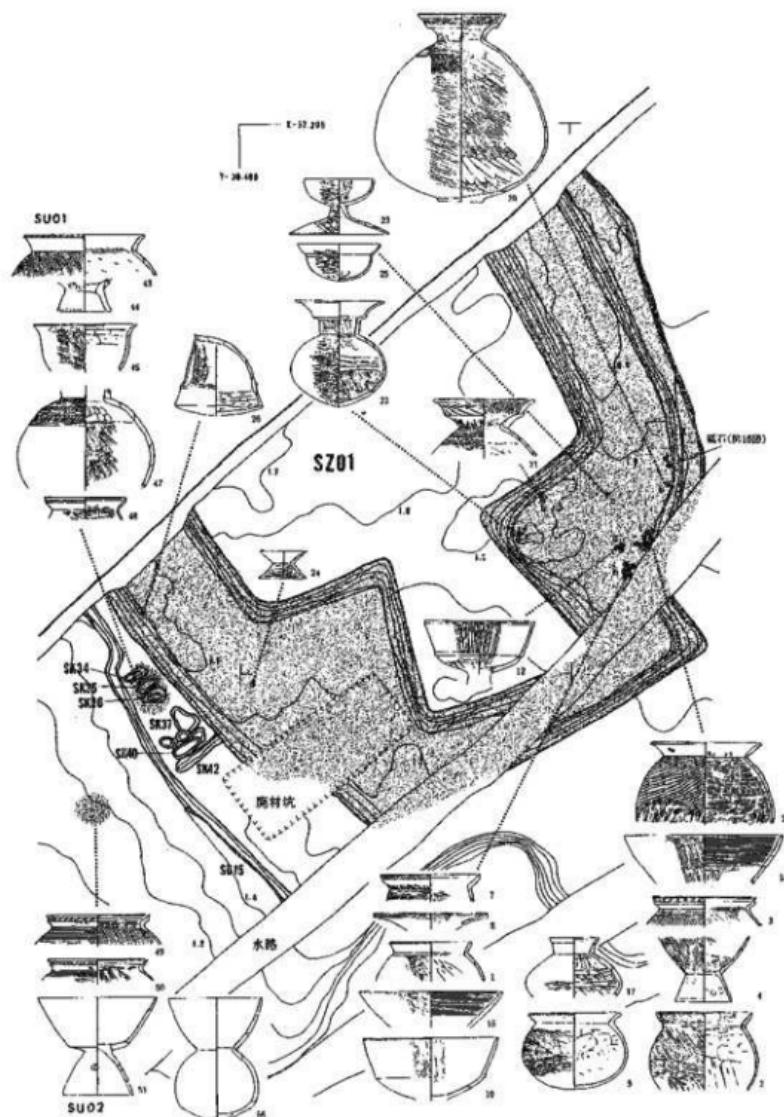
口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は広面上L型2類で無文である。面側面には耳がつき、体部には刻みの入った突帯がめぐり、口縁にも刻みが入れられている。形態はB3類である。

(2) は前方後方形周溝墓からの出土である（第4図）。底部は丸底で、鉢部から覆部はなんの変換点もなく滑らかに移行する。面は広面上L型2類で無文である。鉢部と覆部の境界には突帯がめぐる。覆度指数：100、高さ指数：65、角度：115、形態はD類である。

なお、面天井部及び覆部内面にススの付着が認められる（注2）。

6 豊岡遺跡（名古屋市・資料4）

包含層からの出土である。底部は平底、口縁は受口状口縁で、深めの鉢である。覆部は口縁肩部



第4圖 龜山遺跡 S701 手燒形土器出土狀況

に接合している。面は狭面である。文様は口縁部に刻みがみられるだけで他はハケ整形である。覆度指数：54、高さ指数：33、角度：107、形態はB1類である（杉原莊介1968）。

7 高蔵遺跡（名古屋市・資料4）

包含層からの出土である。底部は丸底、口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は狭面である。文様はみられず、ハケ整形だけである。高さ指数：53、形態はA3類である（杉原莊介1968）。

なお、本遺跡からは名古屋市博物館で展示してある手焼形土器がもう1点出土している。底部は小さな平底、口縁はくの字口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は狭面であるが、接合部付近で耳状に広がる。体部には刻み突帯がめぐり、覆部との接合部にも刻みが入れられている。形態はA3類である。

8 見晴台遺跡（名古屋市・資料4）

環濠集落として古くから有名で、現在までに住居跡170軒以上が調査されている。環濠はV字形の二重の環濠がめぐるようである。環濠は台地縁辺に沿ってめぐると推定されており、濠内の規模は東西160m、南北170mと考えられている。環濠内からは主に弥生時代後期後半の土器が出土する。

（1）は包含層からの出土である。底部は平底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は狭面である。突帯は接合部と体部にめぐり、いずれも刻みが入れられている。覆度指数：77、高さ指数：49、角度103、形態はB3である（飯尾恭之1973）。

（2）は溝状遺構からの出土である。口縁はくの字状の小さな口縁部で、体部に刻みの入った突帯がめぐる（名古屋市教育委員会1968）。

9 鳴海城跡・城遺跡（名古屋市）

溝1から出土しているが、図は公表されていない（伊藤正人1991）。

10 埋田遺跡（津島市・資料4）

乾田の土取りの際に出土したので出土遺構は不明である。鉢部と覆部の接合部の破片で、口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部を残し接合している。形態はA2類である（津島市教育委員会1970）。

11 岡島遺跡（西尾市・資料4）

口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部を残し接合している。体部に突帯がめぐり、鉢部はハケ整形されている。形態はA2類である（松井直樹ほか1994）。

12 欠山遺跡（宝飯郡小坂井町・資料4・5）

（1）は溝1からの出土である。口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。突帯は口縁部と体部にめぐり、いずれも刻みが入っている。形態はA3である。

（2）もおなじ溝1から出土している。底部は平底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部を残し接合している。面は狭面である。面は口縁付近で段をもち突出している。体部に突帯がめぐる。ほぼ完形である。覆度指数：82、高さ指数：49、角度：112、形態はB2類である（鈴木徹ほか1994）。

13 ジグウジ遺跡（知立市）

畑を水田に床下げする際に出土した。底部は平底、口縁は受口状口縁で、写真のため接合法はわ

からないが、口縁端部に接合しているようである。面は狭面であるが、接合部付近は広くなっている。耳と同じ効果をもたしている。体部に刻み突帯がめぐる。鉢部・覆部ともハケ整形である。完形品である。形態はB3類である（知立市1976）。

14 稲荷下遺跡（渥美郡田原町・資料5）

みかん畑の施肥のための溝を掘った時に、多量の土器片とともに出土した。底部は丸底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は狭面である。体部には広い突帯がめぐり、刻みが入れられている。ほぼ完形である。覆度指数：85、高さ指数：51、角度：107、形態はB3類である（田原町1971・渥美町1991）。

15 福江遺跡（渥美郡渥美町・資料5）

写真だけが公表されている。底部は大きな平底、口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。覆部は鉢部に大して小さい。面は狭面で、接合部には刻みの入った耳がつく。体部には刻み突帯がめぐる。完形品である。形態はA3類である（沖 虹兒1930）。

岐阜県

16 小山觀音北遺跡（美濃加茂市・資料5）

口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端に接合している。面は狭面である。突帯は覆部・口縁部・体部の3か所にめぐり、いずれも刻みが入れられている。覆度指数：84、角度：100、形態はA3類である（美濃加茂市1980）。

三重県

17 東日野遺跡（四日市市・資料6）

住居跡からの出土である。底部は平底、体部に刻み突帯がめぐる。ハケ整形である（四日市市教育委員会1966）。

18 西ヶ広遺跡（四日市市・資料6）

一辺2.5×3mの土壌から多量の土器とともに出土した。体部には二重突帯がめぐる（谷本悦次ほか1970）。

19 山城遺跡（龜山市・資料6）

自然の落ち込みから壺、甕、高杯、小型壺などとともに3点の手焙形土器が出土した。

(1) は面の破片である。面には凹線と円形浮文が配されている。面は下L型1類である。

(2) は鉢部で、体部に平行沈線とクシ先刺突文が施され、刻み突帯がめぐる。

(3) は受口状口縁で、覆部は口縁端部を残し接合している。面は狭面である。体部には平行沈線と波状文が描かれ、刻み突帯がめぐり、口縁にも刻みが入れられている。形態はB2である（山田猛1994・注3）。

20 納所遺跡（津市）

(1) は河川跡からの出土である。接合法は覆部の痕跡からみるとB2類のようである。ハケで整形されているが、ヘラによる直弧文風の文様が描かれている。

(2) は包含層からの出土である。底部は平底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は狭面である。全体にハケ整形であるが、口縁にクシの刺突文がめぐる。覆度指数：83、

高さ指数：49、角度：112、形態はB3類である（伊藤久嗣1980・注4）。

21 堂ノ後遺跡（松阪市・資料6）

住居跡からの出土である。口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は広面T型2類で刻みが入れられている。また、接合部には刻み突帯がめぐる（増田安生1989・注5）。

22 阿形遺跡（松阪市・資料7）

いずれも溝からの出土である。

(1) は底部は平底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁肩部に接合している。面は狭面である。覆部にクシ描文が、鉢部には口縁部に刺突文が、体部には平行クシ描文と波状文が施されている。また、体部には刻み突帯がめぐる。覆度指数：50、推定高さ指数：31、角度：121、形態はB1類である。

(2) は受口状口縁で、覆部は口縁に接して口縁肩部に接合している。面は狭面である。耳は覆部から口縁部にかけてつけられている。口縁と体部には刻みが、また体部には平行クシ描文と刻み突帯がめぐる。形態はB2類である（福田哲也1992）。

その他に、10点程度の手焙形土器の破片が出土している（注2・6）。

23 草山遺跡（松阪市・資料7）

草山遺跡は沖積地に細長く広がる低い独立丘陵に形成された弥生時代から中世までの遺跡である。弥生時代から古墳時代初頭にかけての遺構は、住居跡127軒、掘立柱建物跡111軒、方形周溝墓28基、大溝1条、井戸1基が発掘調査されている。遺跡の北側には丘陵南北に横断する幅0.8m～1.8mの溝が走り、途中に幅6mにわたり溝が途切れる部分があり、入口が想定されている。また、小銅鋌が出土していることも注目される。同丘陵上には遺跡に接し、直径52mの伊勢地方屈指の円墳である久保古墳が存在し、三角縁神獣鏡2面を出土している。

手焙形土器は89号住居跡から2点出土している。

(1) は底部が平底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。覆部は小さく円錐形を呈する。面は狭面で、体部には刻み突帯がめぐる。完形品である。覆度指数：83、高さ指数：33、角度：132、形態はB3類である。

(2) は底部が平底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁肩部に接合している。面は狭面である。体部に刻み突帯がめぐる。ほぼ完形である。覆度指数：63、推定高さ指数：39、角度：113、形態はB1類である（伊勢野久好1986）。

その他に(2)と類似する資料が1点出土している（注7）。

24 宮ノ腰遺跡（上野市・資料7）

底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。覆部から口縁部にかけて2個一対の耳がついている。また、体部には刻み突帯がめぐる。覆度指数：73、推定高さ指数：46、角度：102、形態はB3類である（宇佐晋一ほか1971・注8）。

25 小芝遺跡（上野市・資料8）

大溝から14点の手焙形土器が出土している。

下層からは(1)～(7)の7点が出土している。口縁形態がわかるものは(1)の受口状口縁1

点のみで、口縁部に刻み刻みをもつ。覆部は肩部に接合する B1 類である。その他はいずれも体部から底部にかけてのもので、(2)～(4)・(7)は刻み突帯が、(5)は無文突帯がめぐる。(3)の鉢部には赤彩が認められる。(6)は覆部面の破片で綾杉文が施されている。

中層からは (8)～(11) の 4 点が出土している。(9)は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合する B3 類である。(7)も B3 類である。(8)は鉢肩部に平行クシ描き文と刻みが施され、体部には中央に沈線を入れた二重突帯がめぐる。

上層から (13)・(14) の 2 点出土している。(13)は覆部の破片で、内面にはススの付着が認められる。(14)は受口状口縁で耳をもち、体部に刻み突帯がめぐる(中浦基之1993・注9)。

26 才良遺跡(上野市・資料 8)

包含層からの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁肩部に接合している。面は狭面である。体部にはヘラによる平行ヘラ描き文とクシの刺突文が施され、その下に刻み突帯がめぐる。形態は B1 類である(西森平之1983・注10)。

27 蔵持黒田遺跡(名張市・資料 8～11)

本遺跡からは 32 個体の手焙形土器がテラス状遺構、住居跡、土器集積、包含層から出土している。

第 1 区 斜面に平行して幅 4～5 m の土器の集積部が帶状に延びており、341 点の土器が出土した。(1)の手焙形土器はここから出土した。接合部の破片で、口縁は受口状口縁、覆部は口縁端部を残し接合している。覆部から口縁部にかけて耳がつき、口縁はクシ先刺突文が施されている。形態は B2 類である。

第 2 区 斜面を切り込んだ幅 2 m、長さ 5.2 m の平坦面をもつテラス状遺構があり、平坦面の両側から 1 点ずつの手焙形土器が出土した(2・3)。1 点は転倒した状態で、もう 1 点は正位置での出土であったが、覆部が押しつぶされた状態で出土した。こうしたことから 2 個一対でテラスに置かれたものと推察されている。

(2)は底部は平底、口縁はくの字状口縁で、体部のあまり張らない鉢である。覆部は肩部に接合している。鉢部から覆部への移行は滑らかである。面は狭面である。体部に刻み突帯がめぐる。覆度指数: 71、推定高さ指数: 50、角度: 110、形態は A1 類である。

(3)は(2)より体部の張る鉢で、その他は(2)と類似している。覆度指数: 75、高さ指数: 45、角度: 115、形態は A1 類である。

第 3 区 1 点の手焙形土器が出土している。

(4)はくの字状口縁で、覆部は肩部に接合している。体部に刻み突帯がめぐる。形態は A1 類である。

第 4 区 包含層から 14 点の手焙形土器が出土している。

(5・6)は受口状口縁で、覆部は肩部に接合している。(5)には耳がつき、体部には突帯がめぐる。形態は B1 類である。

(7)はくの字状口縁で、体部の張らない鉢である。肩部に覆部を接合している。体部には波状文が描かれ、ハケ目が残る。形態は A1 類である。

(8・9)も A1 類で(8)の口縁部には刻みが入れられている。

(10~17) の形態はわからないが、いずれも体部に突帯がめぐる。

(18) はくの字状口縁で、口縁端部に覆部を接合する A3 類である。

第5区 3点の手縫形土器が出土している。

(19) はくの字状口縁で、覆部は肩部に接合する A1 類である。(20) は受口状口縁で覆部は肩部に接合する B1 類である。(21) は刻み突帯がめぐる体部で、形態は不明である。

第6区 土器集積から2点の手縫形土器が出土している。

(22・23) ともくの字状口縁で、覆部の接合は(22)が肩部に、(23)は口縁端部よりやや下端に接合しており、(22)が A1 類、(23)が A2 類である。

第7区 5点の手縫形土器が出土している。

(24・25) はくの字状口縁で、覆部は口縁肩部に接合する A1 類で、いずれも体部に刻み突帯がめぐり、(24)には耳がつく。(26・27) もくの字状口縁で、覆部を肩部に接合する A1 類である。(28)は体部に突帯がめぐる。

第1号住居跡 遺跡の中央部を東西に走る稜線上の標高222m、水田との比高差22m平坦地につくられている。住居跡は1回ないし2回の拡張が行われているが、炉跡は検出されていない。また、貯蔵穴状の凹地があり、そこから多くの土器が出土し、(29・30)はここから出土した。

(29) は底部は平底、口縁はくの字状口縁で、覆部は肩部に接合している。体部にはハケ目を残し、刻み突帯がめぐる。形態は A1 類である。

(30・31) は突帯がめぐる体部で、(30)の突帯には刻みが入っている。

(32) はくの字状口縁で、覆部は肩部に接合されている。体部には刻み突帯がめぐり、口縁部にも刻みが入れられている。形態は A1 類である(水口昌也ほか1978・注11)。

28 白早稻遺跡(名張市・資料12)

本遺跡では弥生時代終末から古墳時代前期の住居跡が12軒と5か所の土器集積(土器棄て場)が検出されている。手縫形土器は SX16 から出土した。この土器集積は上にある 11・12 号住居跡から棄てられた土器が堆積したものと考えられている。

底部はやや上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は肩部に接合しているため、鉢部から覆部への移行は滑らかである。体部に刻み突帯がめぐる。覆度指数: 71、推定高さ指数: 52、角度: 110、形態は B1 類である(門田了三ほか1979)。

29 城屋敷遺跡(名張市・資料12)

本遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の住居跡8軒と溝が検出されている。手縫形土器は住居跡から7点、溝から1点出土している。

1号住居跡からは4点出土している。

(1) は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は広面 T 型 1 類である。面には3条の隆帯がめぐり、その上段と裏面には波状文が描かれている。覆部中央には二重突帯がめぐり、斜格子文と2本1単位の沈線が、また突帯より下部にも斜格子文が描かれて、覆部から口縁部にかけて耳がつけられている。体部には刻みをもつ二重突帯がめぐり、それより上部の体部には3本の沈線がめぐり、その間を斜線文と斜格子文が施されている。覆度指数: 72、角度: 96、形態は A3 類であ

る。

なお、鉢部内面にススの付着が認められる。

(2) は底部は平底、口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は狭面である。接合部と体部突帯には刻みが入れられている。覆度指数：71、高さ指数：51、角度：92、形態はA3である。

なお、鉢部と覆部内面にススの付着が認められる。

(3・4) は刻みの入った体部突帯と接合部の破片である。

3号住居跡からは3点が出土している。

(5・6) は体部の破片で、刻み突帯である。(7) は覆部の破片である。

溝11からは(8)の1点が出土している。底部は上げ底で大きく、口縁はくの字状口縁で、体部に突帯がめぐる。形態はA類である(門田了三1985)。

その他に、4・5号住居跡から各1点と溝から1点出土している(注12)。

30 西B遺跡(名張市・資料12)

溝からの出土で、底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は肩部に接合している。面は狭面で、小さな覆部である。体部には刻み突帯がめぐり、口縁部にも刻みが入れられている。覆度指数：55、高さ指数：48、角度：115、形態はB1類である(注13)。

なお、鉢部内面にススの付着が認められる。

31 東町遺跡(名張市・資料13)

溝からの出土である。底部は平底、口縁はくの字状口縁で、覆部は肩部に接合している。面は狭面で、覆部は低い。体部に刻み突帯がめぐる。完形品である。覆度指数：63、高さ指数：42、角度：118、形態はA1類である(注14)。

32 奥出遺跡(名張市・資料13)

住居跡からの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁肩部に接合している。体部には突帯がめぐる。形態はB1類である(門田了三1995)。

33 中村3号墳丘下(名張市)

どのような構造に伴うかは不明である。口縁は受口状口縁で覆部は口縁肩部に接合している。覆部には線刻文状のものが描かれている。小片であるため、意味をなす文様であるかどうかは不明である。また、口縁部と体部にはクシ先での刺突文が施されている(注15)。

34 白浜遺跡(鳥羽市・資料13)

包含層から3点出土している。

(1) は受口状口縁で、覆部は口縁全体に接合している。面は狭面で、面側面の接合部に耳がつく。鉢部はハケ整形後、沈線と刻み突帯が施されている。覆度指数：68、角度：88、形態はB4類である。

(2) は上げ底の小さな底部、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は広面T型1類で、2条の隆帯間に円形浮文が配されている。覆部にはヘラによる綾杉文が描かれている。また、体部はハケ整形後に4本の沈線とヘラによる斜線文が施されている。ほぼ完形である。覆度

指數：82、高さ指數：60、角度：110、形態はB3類である。

(3) は受口状口縁で、覆部は肩部に接合している。口縁部にはヘラによる刻みが、体部上半部には刺突文が施されている。また、体部には二重突帯がめぐる。形態はB1類である(川辺昭三ほか1990)。

滋賀県

35 大森遺跡（伊香郡高月町・資料13）

包含層からの出土の覆部の破片で、綾杉文が施されている（黒坂秀樹1986）。

36 葛籠尾崎湖底遺跡（東浅井郡湖北町・資料14）

底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は狭面である。接合部には耳がつけられ、体部には刻み突帯がめぐる。覆度指數：60、高さ指數：43、角度：102、形態はB3類である。（小竹森直子1990）

37 越前塚遺跡（長浜市・資料14）

本遺跡は、弥生時代中期から古墳時代にかけての墓域で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての前方後方形周溝墓を含む周溝墓が63基ほど調査されている。手培形土器は方形周溝墓(SX15)からの出土している。

口縁は受口状口縁で覆部は口縁端部に接合している。覆部、体部は細かなハケで整形されており、その後体部には2段の平行クシ描文と2段の刺突文が施されている。また、口縁部にも刻みが入れられている。覆度指數：76、形態はB3類である（宮成良佐1988・注16）。

38 宮司遺跡（長浜市・資料14）

12世紀頃の遺構と遺物を主体とする遺跡で、手培形土器を出土する土壙1基が単独で存在した。底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は広面上L型2類で、接合部には耳がつけられている。覆部には綾杉文、斜格子文、斜線文とその間に円形刺突文が、体部には3本の沈線と斜線文が施されている。また、体部には刺突文が施された突帯がめぐる。覆度指數：65、推定高さ指數：49、形態はB3類である（吉田直記1988）。

39 東宮司遺跡（長浜市・資料14・15）

溝から2点出土している。

(1) は受口状口縁で、覆部は口縁端部を残し接合している。面は広面上L型1類で上端部には刻みが入れられている。覆部には突帯がめぐり、その上下に斜格子が施されている。覆度指數：86、角度：118、推定高さ指數：48、形態はB3類である。

(2) も受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。覆部には突帯がめぐる。形態はB3類である（注17）。

40 十里町遺跡（長浜市・資料15）

本遺跡は弥生時代後期から古墳時代にかけての墓域で、方形周溝墓が検出されている。

(1) は河川跡からの出土ある。面は広面T型1類で、1条の隆筋がめぐる。覆部には曲線文が描かれ、その中を綾杉文で充填している（長浜市教育委員会1977・注18）。

(2) は3号方形周溝墓からの出土である。底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端

部に接合している。面は狭面で、接合部に耳がつけられている。覆部には沈線で区画したなかに山形文、斜線文、斜格子文が、体部にも斜線文、斜格子文が描かれている。また、体部には刻み突帯がめぐる。ほぼ完形である。覆度指数：72、高さ指数：49、角度：104、形態はB3類である（森口訓男1988）。

41 高田遺跡（長浜市）

河川跡からの出土である。面は広面T型し頬で、覆部には耳がつく。覆部端部には沈線間に山形文と平行クシ構文が、さらに何重にも円を描いた大小の同心円文がいくつも描かれている（林博通1981）。

42 金剛寺遺跡（長浜市・資料15）

溝からの出土ある。体部に刻み二重突帯がめぐる（兼康保明ほか1987）。

43 鴨田遺跡（長浜市・資料15）

弥生時代後期から古墳時代にかけての方形周溝墓を中心とする遺跡で、今までに方形周溝墓が十数基調査されている。また、幅広の溝は河川を利用した環濠になると思われ、地域の拠点集落の可能性も想定されている。

いずれも溝からの出土である。

(1) は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合しているようである。体部には中央に沈線をもち刻みが入れられた二重突帯がめぐる。形態はB3類である（森口訓男1988）。

(2) は受口状口縁で覆部は口縁端部を残し接合している。体部には刻み突帯がめぐる。形態はB2類である（三宅弘1994）。

(3) は底部は丸底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は広面T型1類である。体部には刻み突帯がめぐる。ほぼ完形である。覆度指数：82、高さ指数：53、角度：121、形態はB3類である（中谷雅治1973）。

なお、内面には接合部周辺と覆部全面と面上半部には油煙状のススが付着している（注19）。

44 国友遺跡（長浜市・資料16）

溝からの出土である。底部は丸底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は広面T型1類である。覆部には突帯がめぐり、その上下に斜格子文が描かれている。また、体部には刻み突帯がめぐり、その上に斜格子が描かれている。また、口縁部にも刻みが施されている。覆度指数：72、高さ指数：49、角度：112、形態はB3類である（浜崎悟司1988）。

45 今川東遺跡（長浜市）

溝状遺構から4点出土している。

(1) は体部下半が欠損するもので、受口状口縁で覆部が口縁端部に接合するB3類である。面は広面T型1類で、2本の隆帯がめぐる。接合部と体部には刻み突帯がめぐり、また刻み耳がつく。覆部には天井部の一部を除き、刺突による菱形・X印文、三角文、ヘラによる綾杉文、三角文、斜線文が、体部には斜格子が描かれている。

なお、覆部内面にススの付着が認められる。

(2) も体部下半を欠く資料で、形態はB3類で、面はT型1類である。覆部には綾杉文状に刻ま

れた二重尖帯が、接合部にも刻み尖帯がめぐる。また、覆部の突帯下には綾杉文が、体部には斜線文が描かれている。

なお、覆部内面にはスヌの付着が認められる（北村圭弘1994）。

（3）は覆部面周辺の破片で、面は広面下L型1類で、1条の隆帯がめぐり、下方に円形浮文が配されている。覆部には3本の突帯がめぐり、斜格子、斜線文が描かれている。

（4）は接合部の破片で、形態はB2類で、刻み耳がつく（注20）。

46 法勝寺遺跡（坂田郡近江町・資料16）

方形周溝基からの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部を残し接合している。形態はB2類である（吉田秀則1988）。

47 黒田遺跡（坂田郡近江町・資料16）

溝からの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部をわずかに残し接合している。口縁部には刻みが施されている。形態はB2類である（宮崎幹也1994）。

48 妙楽寺遺跡（彦根市・資料16）

溝からの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部をわずかに残し接合している。面は広面T型2類で、面には綾杉文が、覆部と口縁部にも綾杉文が描かれている。形態はB2類である（伊庭功1993）。

49 中沢遺跡（神崎郡能登川町・資料16）

（1）は溝からの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。覆部には波状文が、口縁部には刺突文が施されている。形態はB3である。

（2）は面の破片で、広面下L型1類で、1条の隆帯と円形浮文が施されている（植田文雄1986・注21）。

50 斗西遺跡（神崎郡能登川町・資料16・17）

斗西遺跡と中沢遺跡はともに接して存在し、一つの遺跡となる可能性もある。これまでに多数の住居跡等が調査されており、この地方の拠点集落としての様相が明らかになりつつある。遺構とともに拠点集落としての様相を示すものとして、他地方の土器が350点ほど出土している。地理的環境から東海系土器と北陸系土器が多く、全体の80%余を占め、その他に山陰系・畿内系土器などが出土地している。

また、時代は4世紀後半から末葉と下がるが、河川の肩の部分に祭祀場と想定されるテラスがあり、そこから壺5点、壺8点、鉢2点、高杯78点、手づくね土器356点、石製模造品9点が出土した。現在までに18点の手捺形土器が出土しているが、大半が河川跡から出土していることは注目される。

（1）は河川跡からの出土の面の破片で、広面T型1類、面の中央に1条の隆帯がめぐる。

（2）も河川跡から出土の覆部の破片で、波状文が描かれている。

（3）も河川跡からの出土の面の破片で、広面T型1類で、面には3条の隆帯がめぐる。また、面端部には斜格子文が描かれている。

（4）は住居跡から出土の面の破片で、広面下L型1類、3条の沈線がめぐる。また、端部には斜線文が描かれている。

(5) は包含層から出土の面の破片で、広面下L型1類、面には1条の縦帯と円形浮文が配されている。

(6) は河川跡から出土の覆部で、2本の刻み突帯がめぐり、さらに縦に2本の刻み突帯が認められる。

(7) は住居跡から出土の鉢部の破片で、刻み突帯がめぐる。

(8) も河川跡からの出土で、口縁は受口状で覆部は口縁端部に接合し、刻み突帯がめぐる。覆部には斜線文が、体部には斜格子文が描かれている。形態はB3類である。

(9) も河川跡から出土の覆部の破片で、2本の刻み突帯と綾杉文が描かれている。

(10) も河川跡からの出土の覆部の破片で、覆部はL口縁端部を残し接合しており、口縁には刻みが入れられている。また、覆部には斜格子文が描かれている。形態はB2類である。

(11) は包含層からの出土の接合部の破片である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、その部分に刻み突帯がめぐる。

(12) は河川跡からの出土の接合部の破片で、覆部は口縁端部に接合し、接合部に突帯がめぐる。覆部には斜格子文が描かれている。形態はB3類である。

(13) は環濠からの出土の接合部の破片で、覆部は口縁端部に接合している。覆部には斜格子文が描かれている。形態はB3類である。

(14) も環濠からの出土の覆部の破片で、覆部は口縁肩部に接合している。面は狭面で、覆部にはヘラによる沈線と波状文が描かれている。形態はB1類である。

(15) 河川跡からの出土の覆部の破片である。面は狭面で刻みが入れられている。覆部には斜格子文が描かれている（植田文雄1988・1993A・1993B、注22）。

51 林・石田遺跡（神崎郡能登川町・資料17・18）

14点の手焙形土器が出土しているが、大半は溝からの出土であるが、溝は環濠になる可能性が高いことが指摘されている。

(1) は溝からの出土の鉢部で、底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。体部には刻みのある二重突帯がめぐる。形態はB3類である。

なお、底部外面ほぼ全面と、内面にはススの付着が認められる。

(2) も溝からの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、接合部には耳がつけられている。体部には平行クシ描文とクシ先の刺突文が施されている。また、突帯がめぐるが剥離している。形態はB3類である。

なお、ススは外表面底部全面に濃厚に付着している。

(3) も溝からの出土である。口縁は受口状で覆部は口縁肩部に接合している。覆部を支えるように半環状の耳が鉢肩部から覆部にかけてつけられている。口縁部にはクシ先刺突文が施され、体部には刻みのある二重突帯がめぐる。形態はB1類である。

(4) も溝からの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。口縁部にはクシ先刺突文が、鉢肩部には平行クシ描文が施され、体部には刻みの入った二重突帯がめぐる。形態はB3類である。

(5) は包含層からの出土である。底部は上げ底、口縁部は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は狭面で、接合部には耳がつく。口縁部にはクシ先刺突文が、体部には平行クシ描文とクシ先刺突文、波状文が施され、またクシ先刺突文が施された二重突帯があげられる。高さ指数：35、形態はB3類である。

なお、覆部内面天井部から面にかけてススが付着している。

(6) も溝からの出土の破片である。口縁は受口状で、覆部は口縁端部に接合しており、耳がつく。口縁部にはクシ先刺突文が体肩部には平行クシ描文が施されている。形態はB3である。

なお、内面にススの付着が認められる。

(7) も溝から出土の破片である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、耳がつく。また、口縁部にはクシ先刺突文が施されている。形態はB3類である。

なお、内面覆部にはススの付着が認められる。

(8) も溝から出土の破片である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。口縁部にはクシ先による刻みが入れられている。形態はB3類である。

(9) も溝から出土の破片である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、耳がつく。口縁部及び鉢肩部、二重突帯にはクシ先刺突文が施されている。形態はB3類である。

(10) も溝から出土の破片である。口縁は受口状口縁で覆部は口縁端部に接合し、耳がつく。面は狭面である。口縁部には刻みが入れられている。形態はB3類である。

(11) も溝からの出土の破片である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、口縁部には刺突文が施されている。形態はB3類である。

(12) は住居跡からの出土である。体部に幅広の突帯があげられる。

(13) は包含層からの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。口縁部には刻みが入れられている。形態はB3である。

(14) は溝から出土の覆部の破片である(西 邦和1995・注23)。

52 湯ノ部遺跡(野洲郡中主町・資料19)

溝の土器割りからの出土ある。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、耳がつく。面は広面下L型2類である。文様はみられず荒いハケ整形である。従度指数：75、角度：123度、形態はB3類である(濱 修1995)。

53 小比江遺跡(野洲郡中主町・資料19)

方形周溝墓からの出土である。底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。文様はみられず、全体にハケ整形であるが、体部には突帯があげられる。形態はB3類である(濱 修1994)。

54 五之里遺跡(野洲郡野洲町・資料19)

溝からの出土ある。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は広面T型1類で、2条の隆帯間に円形浮文が配されている。覆部には沈線と斜線文が施されている。形態はB3類である(滋賀県教育委員会1978)。

55 下縁子遺跡(野洲郡野洲町・資料19)

土壙からの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、刻み突帯がめぐる。覆部には沈線間に斜格子文が描かれている。形態はB3類である（別所健二ほか1977）。

56 新開遺跡（蒲生郡安土町・資料19）

方形周溝墓からの出土である。底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、そこに補強のための突帯がめぐり、耳がつく。面は広面下L型1類である。覆部には綾杉文が、体部には沈線と円弧文が描かれ、突帯がめぐる。覆度指数：81、高さ指数：48、角度：104、形態はB3類である（葛野泰樹ほか1985）。

なお、覆部内面にススの付着が認められる（注24）。

57 蔵ノ町遺跡（近江八幡市・資料20）

方形周溝墓からの出土である。底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、刻みが入れられた耳がつく。広面下L型1類で、2～3条の不連続の沈線が走る。覆部には沈線間に斜格子文が施され、口縁部には刻みが入れられている。覆度指数：73、高さ指数58、角度：95、形態はB3類である（仲川 靖1987）。

58 大門遺跡（守山市・資料20）

(1) は自然の落込みからの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。口縁部には刻みが入り、体部には平行クシ彫文が施されている。体部には刻みのある二重突帯がめぐる。形態はB3類である（大橋信弥1978）。

(2) は溝からの出土である。底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は広面T型1類で、2条の隆帯を施している。覆度指数：63、高さ指数：58、角度：110、形態はB3類である（守山市教育委員会1988・注25）。

59 服部遺跡（守山市・資料20）

服部遺跡は地域の中核的な環濠集落である。環濠の規模は径120～140mが想定されている。沼沢地からの出土である。底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、耳がつく。面は狭面である。覆部には曲線文、沈線間に斜線文、斜格子文、綾杉文が施されている。体部には刻み突帯がめぐる。覆度指数：77、推定高さ指数：51、角度：105、形態はB3類である。（林博通1981）

なお、内面接合部周辺にススの付着が認められる。その他、50点近い手焙形土器が出土している（注26）。

60 笠原南遺跡（守山市・資料20）

溝から出土の面の破片である。面は広面T型1類で、2条の隆帯間に2個・1対の円形竹管文が配されている（木戸雅寿1987）。そのほか、2点の手焙形土器が出土している（注27）。

61 欲賀西遺跡（守山市・資料20）

溝からの出土である。底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、接合部には刻み突帯がめぐる。面は広面T型1類で、2条の隆帯と3個・1対の円形竹管文が配されている。覆部には斜格子文が施され、刻み突帯がめぐり、体部にも斜格子文が描かれている。覆度指数：81、角度：94、形態はB3類である（平井美典ほか1993・注28）。

62 馬場遺跡（草津市・資料21）

河川跡から出土である。面は広面T型1類である。覆部には沈線間に斜線文、山形文、斜格子文が描かれている（小宮猛幸1994）。

63 高野遺跡（栗太郡栗東町・資料21）

溝からの出土である。面は広面T型1類で、2条の隆帯間に円形竹管文が配されている（清水尚1990）。

64 錦織遺跡（草津市・資料21）

(1) は方形周溝裏からの出土である。底部は上げ底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合し、接合部には耳がつき、突帯がめぐる。面は広面T型1類で、1条の隆帯が施されている。覆部には曲線文、沈線間に斜格子文、平行斜線三角文が、体部には山形文が施され、刻み突帯がめぐる。覆度指数：76、推定高さ指：59、角度：104、形態はB3類である（大津市教育委員会1983）。

(2) は出土遺構は不明である。底部は平底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部を残し接合し、接合部には耳がつき、刻み突帯がめぐる。また、口縁部には刻みが入れられ、体部には突帯がめぐる。覆度指数：72、高さ指数：47、角度：100、形態はB3類である（松沢修ほか1990）。

なお、覆部内面天井部と面にかけてススの付着が認められる（注29）。

(3) も方形周溝裏から出土の接合部周辺の破片である。口縁は受口状口縁、覆部は口縁端部をわずかに残し接合している。形態はB2類である（大津市教育委員会1983）。

65 滋賀里遺跡（大津市・資料21）

包含層からの出土の覆部の破片である。面は広面T型2類で、覆部には斜格子文、綾杉文が施されている（田辺昭三ほか1973）。

66 吉武城遺跡（高島郡新旭町・資料22）

溝からの出土である。口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部を残し接合し、突帯をめぐらしている。面は広面T型1類で、接合部近くの面には耳と同じように刻みが入れられている。また、面には2条の隆帯間に竹管を押した円形浮文が、覆部には沈線間に綾杉文、山形文が描かれ、突帯がめぐる。形態はB2類である（大崎哲人1993）。

富山県

67 大境洞穴（氷見市・資料22）

面は狭面である。形態はD類の可能性もあるが不明である（中妻忠彦1968）。

68 半田新遺跡（射水郡大門町・資料22）

古墳墳丘から出土した覆部の破片であるが、封土に混入したのか、供献されたものか不明であるが、報告者は古墳に供献された土器である可能性が高いとしている。面は狭面で、覆部には綾杉文が施されている（橋本正1973）。

69 魚躬遺跡（滑川市・資料22）

包含層からの出土である。底部は平底、口縁は受口状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。面は広面上L型2類で、面は口縁部までおよんできている。口縁部には刻みが入れられている。覆度指数：81、高さ指数：50、角度：110、形態はB3類である（上野章1973）。

なお、覆部内面にはわずかにススの付着が認められる（注30）。

70 杉谷内床ノ山遺跡（小矢部市・資料22）

住居跡からの出土である。底部は平底、口縁は有段口縁で在地の鉢である。覆部は口縁端部に接合している。面は狭面で、面は口縁部付近で飛び出し厚くなり、耳と同じ効果をもたらしている。

覆度指数：96、高さ指数：50、角度：137度、形態はX3類である（小矢部市教育委員会1983）。

なお、鉢部と覆部内面には広範囲にススの付着が認められる（注31）。

71 伊勢領遺跡（射水郡小杉町・資料23）

溝から出土である。口縁は受口状口縁で、体部に刻み突帯がめぐる。形態はX3類ないしはB3類である（上野章ほか1992・注32）。

石川県

72 剣安野々宮遺跡（河北郡津幡町・資料23）

住居跡からの出土である。口縁が屈曲しない鉢で、覆部は口縁端部に接合し、接合部に突帯がめぐる。面は広面T型1類である。覆度指数：70、高さ指数：48、角度：90、形態はD類である（西野秀和1988）。

73 駆頭上の出遺跡（羽咋郡富来町・資料23）

包含層からの出土である。鉢部と覆部は一体につくられており、覆部へは滑らかに移行する。面は狭面である。また、耳が覆部から体部突帯にかけてつき、突帯には間隔をおいて刻みが入れられている（久田正弘ほか1989）。

74 漆町遺跡（小松市・資料23）

口縁は有段口縁で、覆部は口縁端部を残し接合している。面は狭面である。形態はX2類である（田嶋明人ほか1983）。

福井県

75 上勝生田遺跡（福井県・資料23）

環濠からの出土である。口縁はくの字状口縁で、覆部は口縁端部に接合している。覆部には耳がつけられ、体部には刻み突帯がめぐる。形態はA3類である（赤澤徳明1988）。

3 編 年

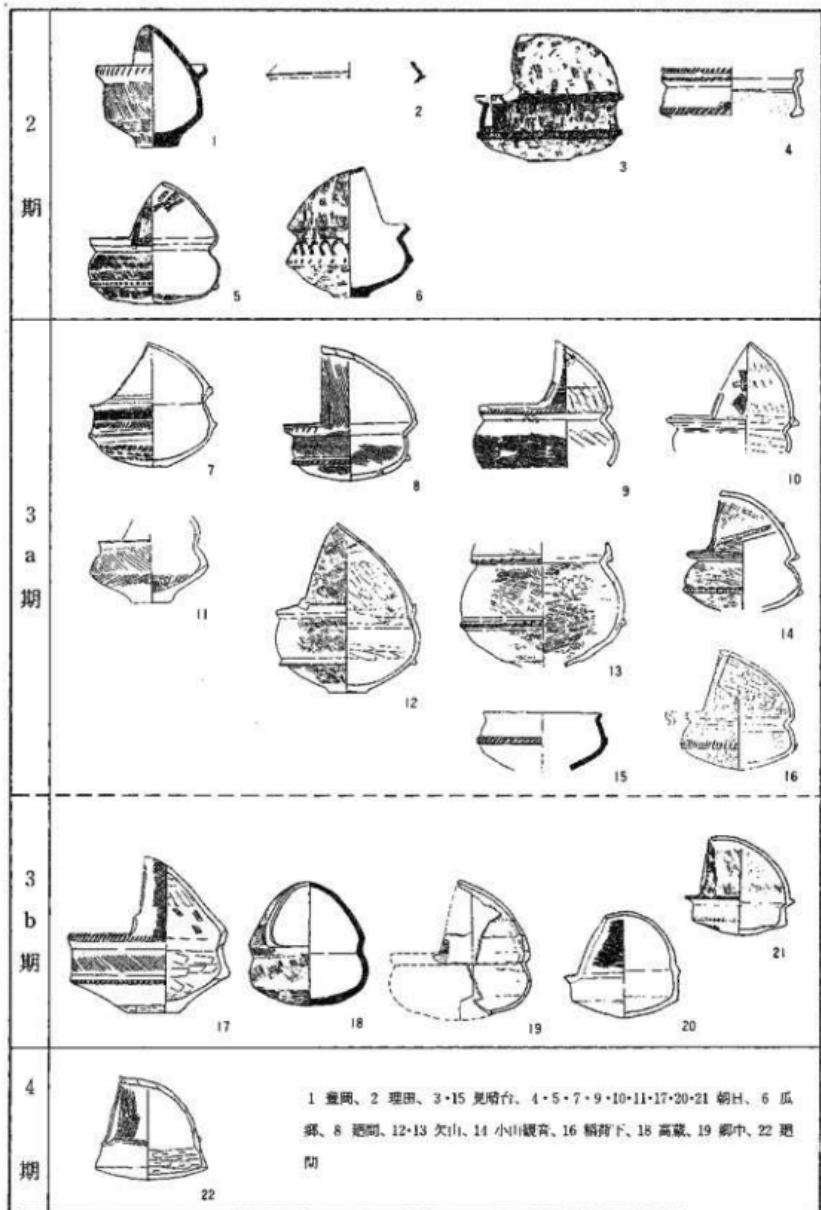
(1) 尾張・美濃地方（第5回）

1期：現在のところ資料は確認されていない。

2期：この時期から手舟形土器が出現する。

底部は平底のものが多く（1・3・6）、上げ底も存在する（5）。鉢の形態は深めの鉢は1のみで、他は胴部が張る鉢である。体部突帯は1には見られないが、他には刻み突帯がめぐる。口縁は受口状口縁が主体で、時期が新しくなるにつれ受口状口縁は崩れていく。

口縁部突帯がめぐるものには刻みが入れられている。覆部の接合法は1だけが1類で、他は3類である。面はいずれも狭面である。また、覆部は3期と比べ小振りで、覆度指数は54、70、77、79、高さ指数は33、40、44、49である。また、文様が施されているものは、6の



1 端筒、2 理田、3-15 夏暗台、4-5-7-9-10-11-17-20-21 朝日、6 瓜
饼、8 通间、12-13 欠山、14 小山腰带、16 鞍背下、18 高藏、19 楔中、22 透
间

瓜郷遺跡の資料のみである。耳はこの時期に出現する。

3a期：平底は減少する代わりに丸底が増加し、深めの鉢は消滅する。体部突帯は大半のものにめぐるが、突帯がつけられていないものも存在する。また、突帯には刻みがないものもある。突帯は近江地方によくみられる二重突帯もわずかに存在する。口縁は受口状口縁が主体であるが、本來のものと比較すると退化している。覆部の接合法は3類が主体であるが、2・4類もわずかに存在する。面はほとんどが狭面であるが、広面でも面の狭い2類がわずかに存在する。覆度指数は76、82、84、85、高さ指数51、49、51と2期より覆部が発達している。また、文様のあるものはわずかである。耳は多くのものにつけられている。

3b期：底部は丸底のみとなり、手焙形土器は全体に小型化し、鉢も扁平なものとなる。体部突帯は消滅し、受口状口縁もなくなる。鉢形態はC類が出現し、D類（グルマ型）に近づいていく。

覆度指数は88、89、高さ指数は53、58、59と3a期よりもさらに覆部が発達する。

4期：出土量が減少する。現在のところ1例だけが知られている。鉢部と覆部の区別はなくなり、グルマ型となる。

（2）伊賀・伊勢志摩地方（第6図）

1期：現在のところ資料は確認されていない。

2期：この時期から手焙形土器が出現する。

畿内の影響下にあると考えられるくの字口縁のA類と、近江の影響下に出現したと思われるB類の二者が存在する。A類は畿内に近い名張市に多くみられる。A類の底部は平底で、鉢はやや深めのものもあるが、一般的には浅く口径の大きいものが多い。体部には刻み突帯がめぐる。覆部の接合法は口縁肩部に接合する1類が多い。耳はみられない。覆度指数は64、71、75、高さ指数42、45、50である。B類の底部も平底で、鉢は2期でも古い段階のものは体部が張らないが、新しい段階になると体部の張る鉢となる。体部には刻み突帯がめぐるが、近江地方にみられる二重突帯も存在する。B類は文様で飾られるものが多く、耳がみられる。また、在地鉢と思われるものには、独自の波状文がつけられる。覆度指数は61、73、高さ指数は31、46である。

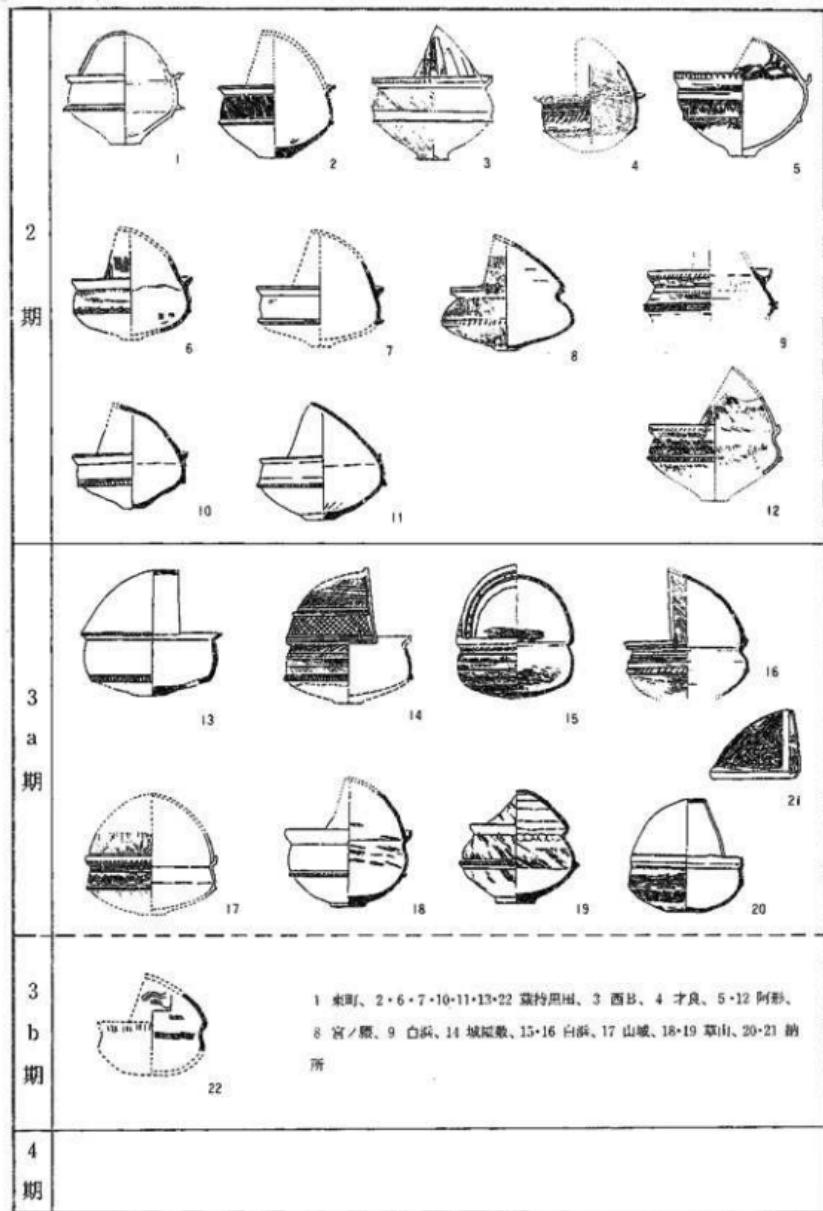
3a期：B類には広面が出現し、広面のものは鉢部・覆部とも飾られる。城屋敷遺跡出土例の場合は、文様構成・体部の二重突帯・覆部突帯が存在し、また白浜遺跡の資料は底部が上げ底であり、近江のものときわめて類似している。B類でも草山遺跡出土資料のように在地鉢の場合は飾られない。A類の鉢部と覆部の接合法は1・3類があり、覆度指数は71、高さ指数は51、52、B類の接合法は1～3類があり、耳も存在する。B類の覆度指数は72、82、83、高さ指数が49、60で、覆部は2期より発達している。

3b期：あまり出土がない。器体は小型化し、口縁の肩山もゆるやかになっていく。

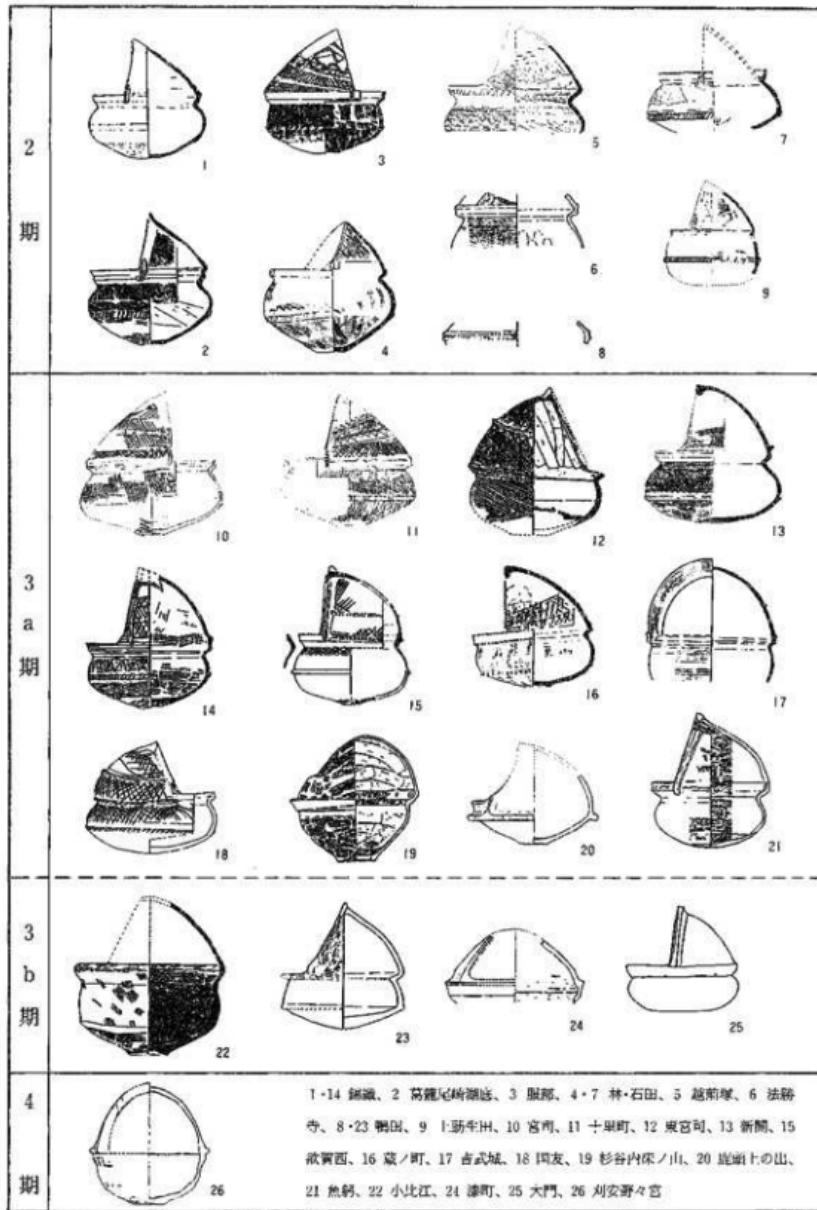
4期：現在のところ資料は確認されていない。

（3）近江・北陸地方（第7図）

1期：現在のところ資料は確認されていない。



第6図



第7図

2期：接合法は1・2も存在するが、3類主体である。一部に綾杉文、斜格子文、波状文が施されるが、多くのものはハケ整形のみである。また、面も多くのものが狭面であるが、広面T型、下L型が出現するが面の幅は狭い。また、耳も存在する。底部は上げ底を特徴とし、体部突帯は中央にへらで沈線を引くために、一見2本の突帯にみえる二重突帯が存在する。これは、近江地方の特徴である。覆度指数は72、77、81、高さ指数は35、38、47、48、51である。

3a期：広面が多くなるとともに面にも文様がつけられるようになる。さらに鉢部・覆部にも盛んに各種文様がつけられる。この時期がもっとも手縫形土器が飾られる時期である。この段階の接合法は3類が主体である。底部は上げ底である。また、二重突帯はみられなくなる。覆度指数は65、72、76、81、高さ指数は49、50、58、59で2期より覆部が発達している。

3b期：この時期になると文様はつけられなくなる。底部は上げ底であるが、丸底も出現する。面は広面が多くみられる。

4期：現在のところ資料は確認されていない。

4 出土遺構

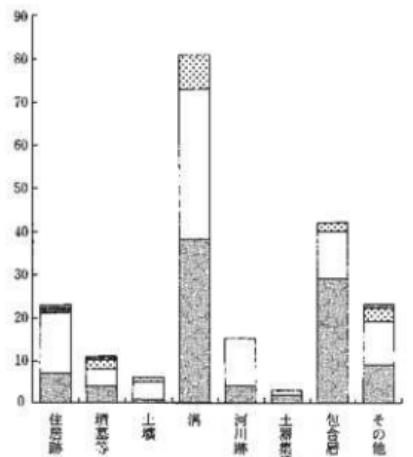
現在知られている資料は204点で、1期0点、2期94点、3a期90点、3b期16点、4期2点、不明2点である。2期から3a期にかけて大半が出土していることがわかる。この傾向からすると、今後も3b期以降の資料はさほど多く出土することは考えられない。

表1 時期別・遺構別出土量

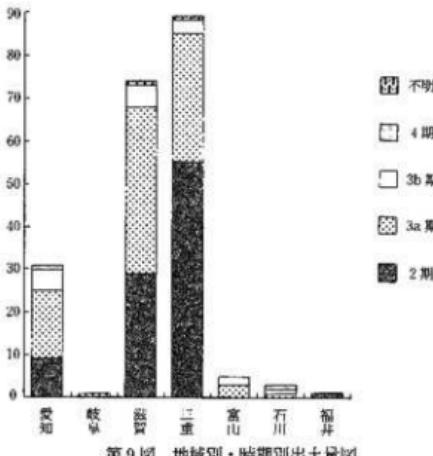
	住居跡	墳墓	土壙	溝	河川跡	土器集積	包含層	その他	合計
1期	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2期	7	4	1	38	4	2	29	9	94
3a期	14	4	4	35	11	1	11	19	90
3b期	0	2	1	8	0	0	2	3	16
4期	1	1	0	0	0	0	0	0	2
不明	1	0	0	0	0	0	0	1	2
合計	23	11	6	81	15	3	42	23	204

手縫形土器は各類遺構から出土している。それを表にすると表1になる。

表1を図にすると第8図になる。溝や住居跡、包含層からの出土が多いことがわかる。



第8図 時期別・遺構別出土量



第9図 地域別・時期別出土量図

合でススの付着が認められるからである。愛知県朝日遺跡の12・13や滋賀県鶴田遺跡の手焙形土器には油煙状の真っ黒なススの付着が認められ、動物質のものか油性の強い木を燃やしたような印象を受けた。こうした事実から、手焙形土器の内部で火を燃やしたと考えてまず間違いない。

8 出土遺構等からみた手焙形土器の使用から廃棄までのモデル

手焙形土器は各種遺構から出土する。出土遺構を祭祀の対象とするか、廃棄場所とするかによってそのイメージは大きくかわる。手焙形土器は完形で出土することはまれで、204点中ほぼ完形に復

5 地域別出土量（第9図）

第9図をみてもわかるように、圧倒的に滋賀と三重が多い。公表されている資料で三重が一番多いが、滋賀県服部遺跡では50点近い資料が出土していることから、実数では滋賀が三重を上まわっている。

6 形態別出土量（第10図）

愛知はA類とB類がほぼ半数で、滋賀はB類のみと考えられる。三重では名張市など奈良に近い地域ではA類がみられるが、他の地方では近江と畿内の影響を受けている。富山・石川では在地の鉢を使用したX類も存在する。

7 ススの付着

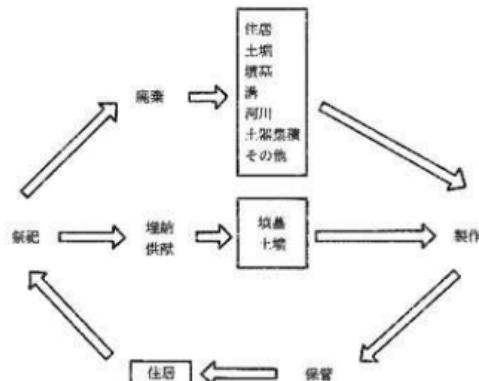
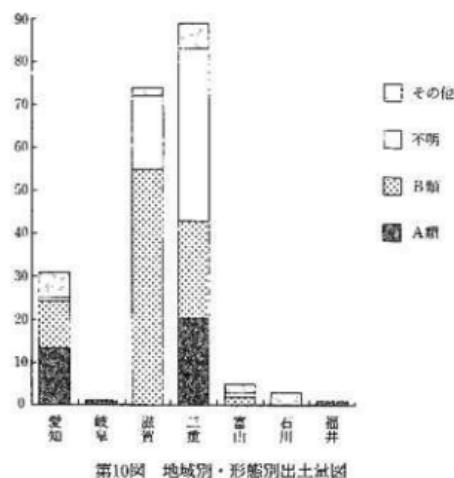
内面にススが付着している資料は27点確認できた。全体の約12%である。器面の状態が悪く整形等まったく観察できないものもあり、観察していない資料も多くあるので、実際にはもっと多くの資料にススが付着していると考えいいだろう。というのは、器面の状態がよいものには、かなりの割

原されているのは32点で全体の約16%である。こうしたことから、手焙形土器はある祭祀に使用されると、破碎し廃棄するのが原則だったようだ。ただ、墳墓の場合は完形で出土する例が多いことから、そのまま埋納あるいは供獻されたと考えられる。そのモデルを示すと第11図のようになる。

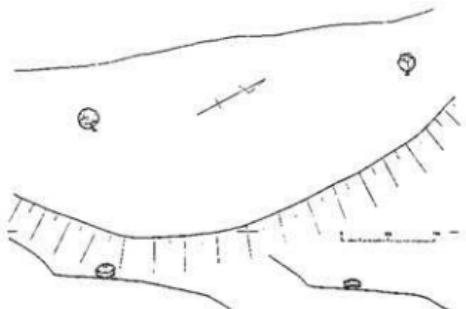
今回の対象地域での手焙形土器の完形及び完形に近い形で出土する率は、住居跡が23点中5点の21%、墳墓は11点中3点の27%、土壙は6点中1点の17%、溝は81点中10点の10%、河川跡15点中0、土器集積3点中0、包含層42点中11点の12%、その他不明のものは22点中8の36%である。出土遺構が判明しているなかでは、墳墓、住居跡、土壙の順で完形での出土率が高い。その中で土壙は17%と三者のなかで最も低い出土率であるが、和歌山県筆ノ瀬遺跡では、一つの土壙に4個体の完形の手焙形土器が埋納されていることから（和歌山県1983）、土壙に埋納する例があったことは確実であり、本モデルが成立することを保証している。

手焙形土器は火を使う祭祀のために考案され、祭祀が終了すると

廃棄あるいは埋納・供獻された。廃棄場所として身近な住居跡や河川・溝などが選ばれた。従来、廃棄場所が祭祀の対象とする見解もあったが、廃棄場所として考える方が妥当だろう。ただ、手焙形土器の祭祀の対象は不明であるが、限定された祭祀だけに用いられたのではなく、広範囲な祭祀に使用されたことが想定でき、廃棄遺構も祭祀の対象であった可能性は十分ある。そして、住居跡から出土する完形品に近い手焙形土器は新たな祭りのために製作・保管されたと考えることによって、出土遺構からみた手焙形土器の動きの輪が完結するのである。



第11図 手焙形土器の循環モデル



第12図 名張遺跡テラス手培形出土状況

ここで、蔵持黒田遺跡の概要を記すと、標高223mを最高所とする丘陵の尾根に立地する遺跡で、水口面との比高差は23mをはかる。発掘調査された遺構は住居跡3軒、さらに保存地区に1軒、先に記したテラス状遺構1基、溝1条、土壙2基、土器集積3か所、焼土遺構4か所であった。遺跡の約四分の一程度が保存地区になっているが、谷部が多いため住居跡等の遺構がこれ以上に存在するとは考えられない。

発掘区は7区に分けられているが、1区からは土器群2か所と1点の手培形土器が、2区からは1軒の住居跡、テラス状遺構と2点の手培形土器が、3区では1か所の土器集積とそこから2点の手培形土器が検出されている。4区からは1基の焼土状遺構が、5区では1条の溝、1基の土壙と3点の手培形土器が、6区では1か所の土器集積と2点の手培形土器が、7区では1軒の住居跡、1か所の土器集積、1基の土壙、1か所の焼土状遺構と手培形土器が5点検出された。8区では遺構・遺物は検出されなかった。また、特に区名はついてないが、遺跡最高所の平坦面には2軒の住居跡と1か所の焼土が検出され、1軒の住居跡から4点の手培形土器が出土した。

焼土遺構については、例えば7区の焼土遺構(SX10)は「赤褐色の焼土を中心にその周辺に黒色の炭が広がる」というもので、焼土は固く、明らかにこの場所で相当量の火をもちいたことがわかる」という。そして、7区の他の遺構との関係は「最初に斜面の鞍部に近いところにSD2(著者注:土壙)が掘られ、その斜面上方で、火がえんえんと焚かれ、その後にSD2に土器が置かれ、そして近くの地山を掘って採集したと思われる白色砂質土をもって埋められた」という現象が想定できる」という。土壙には「8個の完形もしくはそれに近い土器が配置されたがごとく並んでいた」と推定されている。

さらに、焼土遺構が形成される要因として、1. 生活のための煮炊き、2. 狼煙、3. 土器焼成、4. かがり火、5. 祭祀のために火を燃やすなどを揚げ、焼土遺構には一片の土器片も含まないことと、土壙とともに焼土遺構が埋められたことが考えられることから、焼土遺構と土壙は祭祀的様相をもつと推察している(水口ほか1978)。

土器は全体で約1300個体が確認されている。その比率は報告書によると甕275個体(21.3%)、壺

9 手培形土器の原位置出土例

三重県蔵持黒田遺跡では幅2m長さ5.2mのテラス状に造られた平坦面の南北両端から、置かれた状態で2個の手培形土器が出土した。南端の手培形土器は転倒した状態で出土したが、置かれた状態に戻すと東に開口部を向けていた。また、北端の手培形土器は正位置で出土し、やはり開口部は東につまりテラスの先端部に向けていた(第12図)。

455個体（32.3%）、鉢173個体（13.4%）、有孔鉢28個体（2.2%）、高環304個体（23.5%）、蓋7個体（0.5%）、器台15個体（1.2%）、手縫形土器32個体（2.5%）であった。甕に比べ甌の比率が高いこと、蓋と手縫形土器が多く出土していることが注目される。いずれにせよ、1300個体の土器数は3軒の住居跡が保有・使用した土器とするには多すぎる。祭祀に使用された土器が廃棄されたと見るべきで、土器集積は土器が集中的に廃棄され形成されたことが想定できる。

さて、テラス状遺構であるが、ここからは上部から流入した可能性もあるが、甕、ミニチュア鉢、高環、甌が併せており、これらが手縫形土器とセットで置かれたことが推定されている。同じ名張市十山遺跡では「南面する斜面下方に住居址が位置し、上方斜面に、テラス状遺構4か所、土器集積3か所が検出されており、テラス状遺構には唐古45号竪穴上層（筆者注：報告書の第五様式第一式）平行の長頭壺を含む、甕、鉢、器台、ミニチュア甌などが置かれている。また、土器集積は小形丸底壺を含む布留式の土器集積で、そのひとつC11地区土器集積では、上器のほか滑石製模造品（劍形品、有孔円板、勾玉、管玉）、青銅鏡2面、鐵製品（劍、鉗、鑄造鐵斧）を含むもので、明らかに祭祀的性格をもつ」（水口1978）と考えられている。両遺跡は類似性が強いことから、藏持黒田遺跡のテラスも祭祀遺構としての性格が想定できる。斜面をカットして形成したテラスで何らかの祭祀が行われたことは間違いないだろう。なお、藏持黒田遺跡のテラスは水田に向かって開放している。

このようにみていくと、藏持黒田遺跡は遺跡全体が祭祀とかかわるものと考えられる。特に住居跡に炉が存在しないことは、日常的な住居とは考え難く、祭祀の際に臨時に使用する住居が想定できよう。まさに、遺跡全体が祭祀場的様相を帯びているのである。報告書でも最後に記しているように、「本遺跡出土の手縫形土器には、形態的な変遷がみられることから、一次的なものではなく、遺跡の存続期間の中で何回も繰り返し祭祀が行われたものと考えられる」のである。

手縫形土器は火を使用した祭祀に用いたと考えるが、その内容については不明のままであり、今後の課題である。

さいごに

本稿を草するにあたり、多くの方々の援助があった。記して感謝の意を表したい（敬称略）。

赤塚次郎、伊藤隆三、井上光大、植田文雄、上野 章、大谷 順、狩野 賢、笠井賢治、門田了三、岸本雅敏、木村有作、小竹森直子、杉浦隆史、田崎明人、田中勝弘、谷本悦次、西 邦和、西森平之、野口哲也、原田 幹、林 博通、福田哲也、宮成良佐、三宅 弘、森口訓男、森川幸雄、山崎秀二、山田 猛、山本一博。

なお、本稿は平成7年度当事業団研究助成の成果である。

注

- 1 (財) 愛知県埋蔵文化財センター及び愛知県瀬戸貝殻山貝塚資料館の御好意により実見することができた。記して感謝の意を表したい。
- 2 (財) 愛知県埋蔵文化財センターの御好意により実見することができた。記して感謝の意を表したい。

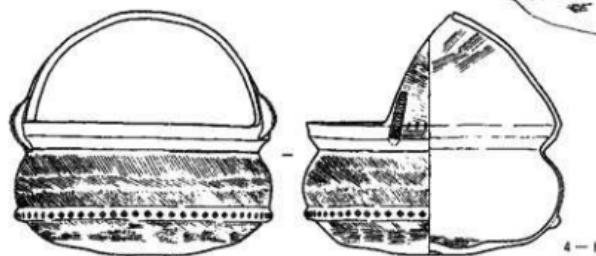
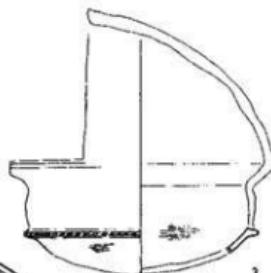
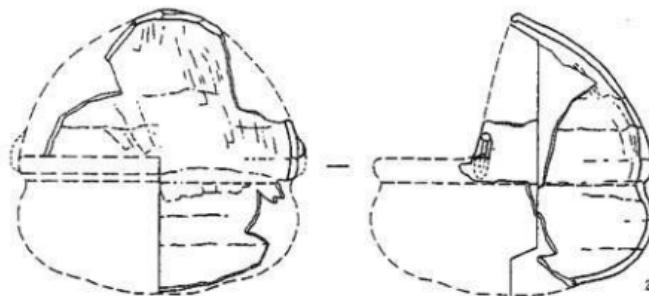
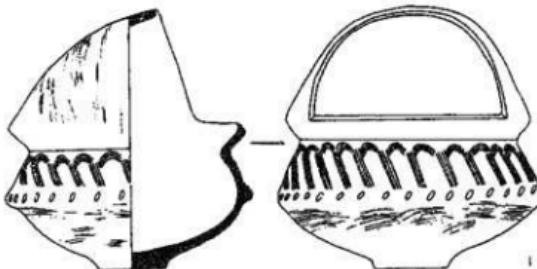
- 3 一童県埋蔵文化財センターの御好意により実見することができた。記して感謝の意を表したい。
4 注3と同じ
5 注3と同じ
6 注3と同じ
7 松本市教育委員会の御好意により実見することができた。記して感謝の意を表したい。
8 上野市教育委員会の御好意により実見することができた。記して感謝の意を表したい。
9 注8と同じ
10 注8と同じ
11 名張市遺跡調査会の御好意により実見することができた。記して感謝の意を表したい。
12 注11と同じ
13 未発表であるが、門田了二氏から資料提供を受けた。記して感謝の意を表したい。
14 注13と同じ
15 注11と同じ
16 長浜市教育委員会の御好意により実見することができた。記して感謝の意を表したい。
17 未発表であるが、長浜市教育委員会から資料の提供を受け、実見することができた。記して感謝の意を表したい。
18 注16と同じ
19 滋賀県立安土城博物館の御好意により実見することができた。記して感謝の意を表したい。
20 (財) 滋賀県文化財保護協会の御好意により実見することができた。記して感謝の意を表したい。
21 能登川町教育委員会の御好意により実見することができた。記して感謝の意を表したい。
22 注21と同じ
23 注21と同じ
24 注20と同じ
25 守山市教育委員会の御好意により実見することができた。記して感謝の意を表したい。
26 注25と同じ
27 注25と同じ
28 注29と同じ
29 注29と同じ
30 富山県埋蔵文化財センターの御好意により実見することができた。記して感謝の意を表したい。
31 小矢部市教育委員会の御好意により実見することができた。記して感謝の意を表したい。
32 注30と同じ

引用文献

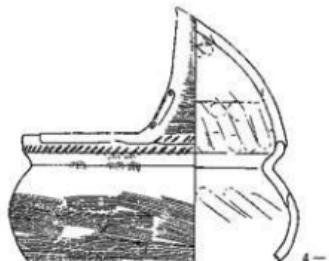
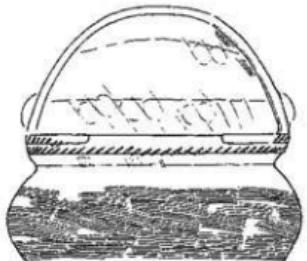
- 愛知県教育委員会1982『朝日遺跡』
赤澤徳明1988「福井県『弥生時代の環濠集落をめぐる話問題II』」愛知考古学談話会
赤塚次郎1990『堀間遺跡』(財) 愛知県埋蔵文化財センター
沼美町1991『沼美町史』考古・民俗編
伊藤久嗣1980『納所遺跡』一童県教育委員会
伊藤久嗣1981「納所遺跡出土の特殊文様を描く手縫型土器」『考古学雑誌』67巻1号
伊藤雅人1991「鳴海城跡・城跡周辺発掘調査の概要」名古屋市教育委員会
伊庭功ほか1993『妙楽寺遺跡・尼子遺跡』(財) 滋賀県文化財保護協会
飯尾恭之1973「尾張における後期弥生式土器の編年研究(1)」「古代人」27・28 名古屋考古学会
石黒立人1994『朝日遺跡V』(財) 愛知県埋蔵文化財センター
宇佐晋一ほか1971「伊賀に於ける先牛式土器・土師器集成」『伊賀郷土史研究』3

- 横田文雄1986「中沢遺跡」能登川町埋蔵文化財調査報告書第6集 能登川町教育委員会
- 横田文雄1988「斗西遺跡」能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集 能登川町教育委員会
- 植川文雄1993A「斗西遺跡（2次調査）」能登川町埋蔵文化財調査報告書第27集 能登川町教育委員会
- 植川文雄1993B「斗西遺跡（3次調査）」能登川町埋蔵文化財調査報告書第37集 能登川町教育委員会
- 上野草ほか1973「魚飼遺跡発掘調査報告書」滑川市教育委員会
- 上野草ほか1992「小杉町伊勢領遺跡発掘調査概要」富山市小杉町教育委員会
- 大崎哲人ほか1993「針江川北（II）遺跡・古武城遺跡」（財）滋賀県文化財保護協会
- 大津市教育委員会1983「鎌織遺跡発掘調査報告書」
- 大橋信弥1978「湖南中部流域下水道管理道路関連遺跡発掘調査報告書」滋賀県教育委員会
- 沖 虹兒1930「愛知縣の石器時代」
- 小矢部市教育委員会1983「杉谷内床ノ山遺跡発掘調査報告書」
- 甲斐忠彦1968「富山県水見市大坂洞窟出土の上輪式土器」考古学集刊 4巻2号
- 門田了三1979「名張市遺跡調査会概要II」名張市遺跡調査会
- 門田了三1985「城原敷遺跡」名張市教育委員会
- 門田了三1995「奥出遺跡・奥出古墳群」名張市遺跡調査会
- 兼康保明ほか1987「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書IV-3」（財）滋賀県文化財保護協会
- 木「雅寿1987「一般駁道荒見上野近江八幡線特殊改良第一種工事に伴う笠原南遺跡発掘調査報告書」（財）滋賀県文化財保護協会
- 北村圭弘1994「今川東遺跡・十押寺遺跡」（財）滋賀県文化財保護協会
- 葛野泰樹ほか1985「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書」（財）滋賀県文化財保護協会
- 黒田秀樹1986「高月町埋蔵文化財発掘実績報告書」第1集Ⅲ-3 高月町教育委員会
- 小竹森直子1990「手縫形土器雑想」『紀要』第3号 （財）滋賀県文化財保護協会
- 小宮肇幸ほか1994「下ノ笠堂跡・馬場・上笠遺跡発掘調査報告書」草津市教育委員会
- 清水 尚1990「高野・辻遺跡発掘調査報告書」（財）滋賀県文化財保護協会
- 滋賀県教育委員会1978「滋賀県文化財調査年報」
- 鈴木 徹ほか1994「欠山遺跡」小坂井町教育委員会
- 杉原莊介1968「伊勢地方」「弥生式土器集成」
- 高橋一大1996「手縫形土器の研究（1）—東国編—」『埼島地域文化の研究』下津弘君・堺越千也君追悼論文集刊行実行委員会
- 田嶋明人ほか1983「塗町遺跡II」石川県立埋蔵文化財センター
- 川辺昭三ほか1973「湖西線関係遺跡調査報告書」滋賀県教育委員会
- 谷本説次ほか1970「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」二重県教育委員会
- 知立市1978「知立市史」上巻
- 津島市教育委員会1970「塙田遺跡」津島市史（資料編1）
- 豊中市教育委員会1989「瓜中・雨谷」
- 豊橋市教育委員会1963「瓜郷」
- 中浦基之1993「小芝遺跡発掘調査報告」上野市教育委員会
- 山谷雅治ほか1973「鶴田遺跡」「国道8号線長浜バイパス開通遺跡調査報告書II」滋賀県教育委員会
- 名古屋市教育委員会1968「児白台遺跡第I・II・III次発掘調査概要」
- 長浜市教育委員会1977「宮司・十鬼町（字十五町地区）遺跡調査報告書」
- 西 邦和1995「林・山川遺跡」能登川町埋蔵文化財調査報告書第36集 能登川町教育委員会
- 西野秀和1988「津幡町刈安野々宮遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 西森平之1983「才良遺跡発掘調査報告」上野市教育委員会

- 橋本 正1973『申田新造跡発掘調査概報』富山県教育委員会
- 猪 修1994『県道完見上野近江八幡線道路改良工事に伴う中主町内遺跡発掘調査報告書（上）』（財）滋賀県文化財保護協会
- 猪 修1995『湯ノ郡遺跡発掘調査報告書 I』（財）滋賀県文化財保護協会
- 浜崎悟司1988『は場整備関係遺跡発掘調査報告書 XIV-1』（財）滋賀県文化財保護協会
- 林 博通1981『滋賀県における弥生式土器に施された絵画・記号的图形』『考古学雑誌』67巻1号
- 久田正弘ほか1989『鹿島上の遺跡』石川県富来町教育委員会
- 平井美典ほか1993『欲賀西遺跡発掘調査報告書』（財）滋賀県文化財保護協会
- 福田哲也1992『阿形遺跡』『ヒタキ庵守・打田遺跡・阿形遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター
- 別所健二ほか『野洲町下様子遺跡 E・S 地区』『は場整備関係発掘調査報告書 VI-II』滋賀県教委員会
- 増田安生1989『松阪市深見町宝ノ後遺跡』『昭和61年度農業基盤整備事業地区埋蔵文化財発掘調査報告書 I』三重県教育委員会
- 松井直樹ほか『岡島遺跡』西尾市教育委員会
- 松阪市教育委員会1984『草山遺跡発掘調査月報』9
- 松澤修ほか1990『鐵織・南滋賀遺跡近江国行跡発掘調査報告書 IV』（財）滋賀県文化財保護協会
- 松原勝治ほか1992『岩倉城遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 美濃加茂市1986『美濃加茂市史』通史編
- 三宅弘1994『鴨田遺跡発掘調査報告書』（財）滋賀県文化財保護協会
- 水口昌也ほか1975『藏持黒田遺跡』名張市教育委員会
- 宮崎幹也1994『黒川遺跡 3』滋賀県近江町教育委員会
- 宮成良佐1988『越前塚遺跡発掘調査報告書』『長浜市埋蔵文化財調査資料』第5集 長浜市教育委員会
- 森口訓男1988『十里町遺跡・鴨田遺跡調査』 長浜市教育委員会
- 守山市教育委員会1988『大門遺跡の調査』『守山市文化財調査報告書』第27集
- 山田 猛1994『山城道路・北斎古遺跡』三重県埋蔵文化財センター
- 山木雅和1990『白浜遺跡発掘調査報告書』本浦道路調査委員会
- 吉田直記1988『宮司遺跡調査報告書』『長浜市埋蔵文化財調査資料』第3集 長浜市教育委員会
- 吉田秀則1988『一般国道 8号線（長浜バイパス）関連発掘調査報告書 V』（財）滋賀県文化財保護協会
- 四日市市教育委員会1966『四日市市埋蔵文化財調査報告』第1集
- 和歌山県1983『笠ノ瀬遺跡』『和歌山県史』



1 瓜鄉 2 鄉中 3 岩倉城 4 朝日



4-2



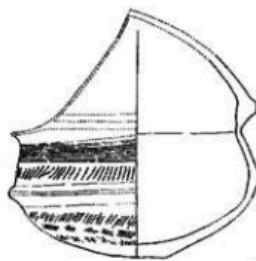
4-3



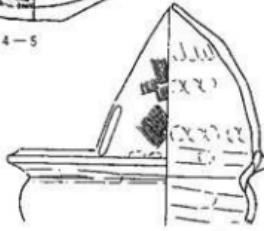
4-4



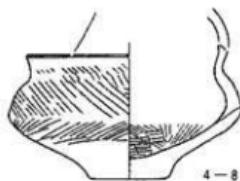
4-5



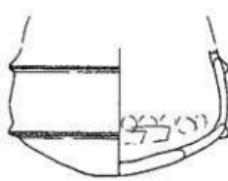
4-6



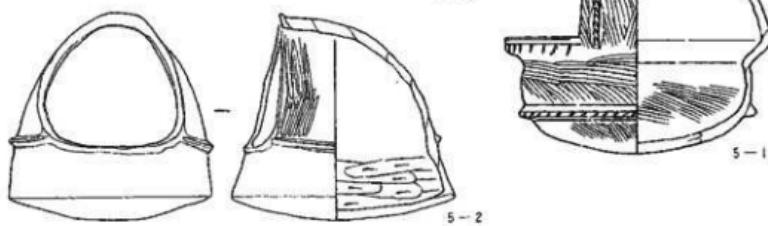
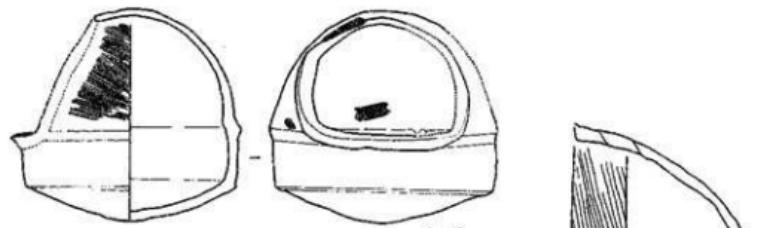
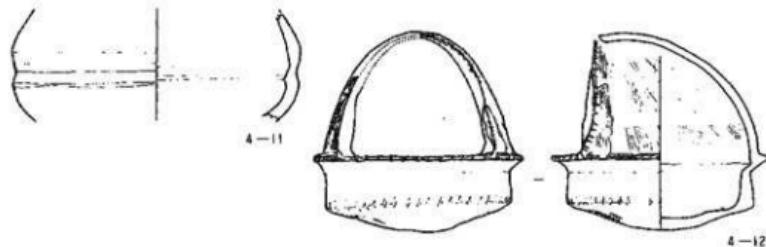
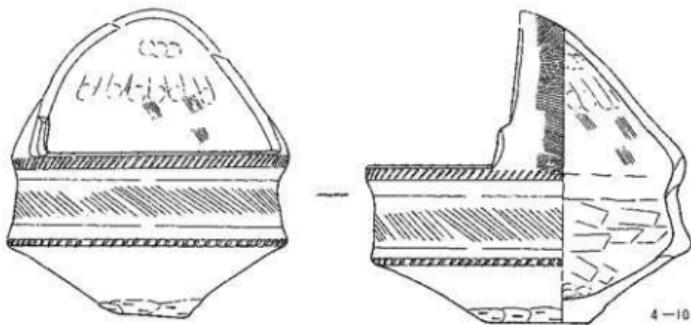
4-7



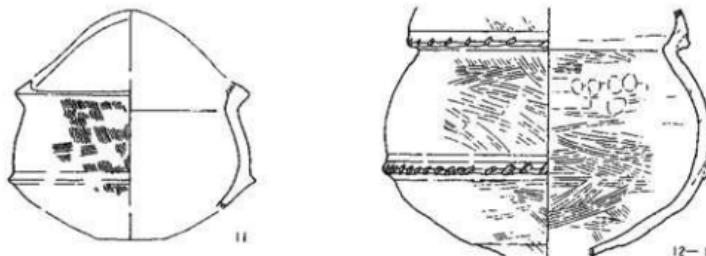
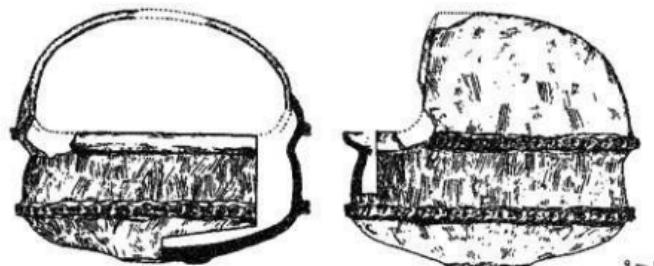
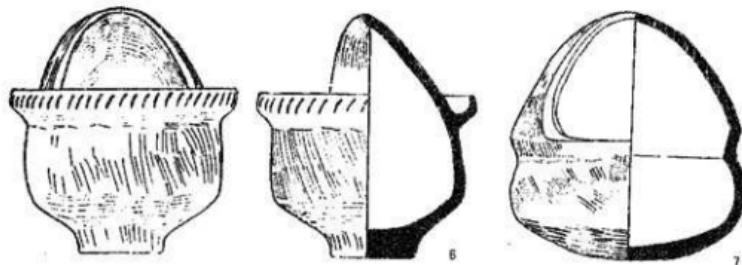
4-8



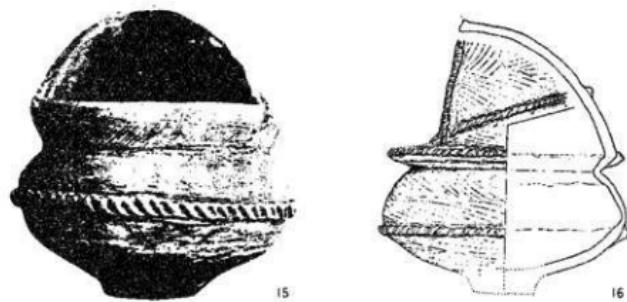
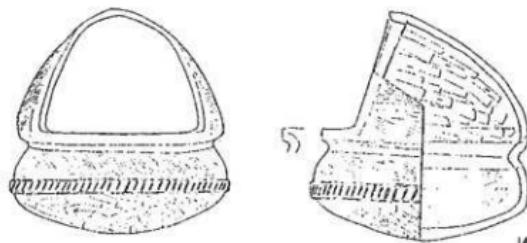
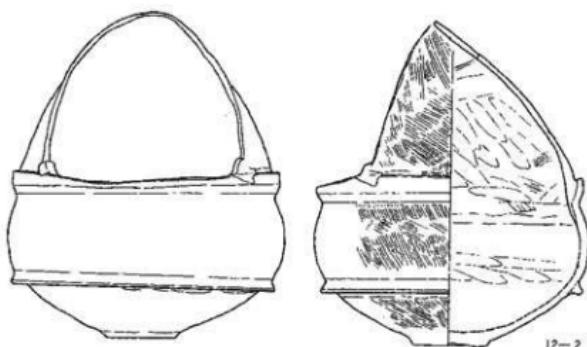
4 朝口



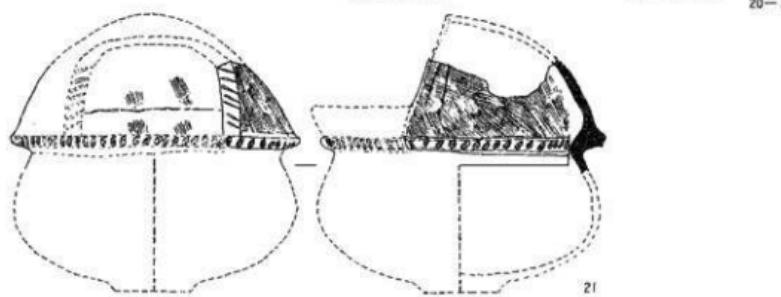
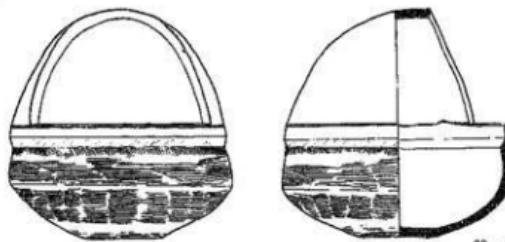
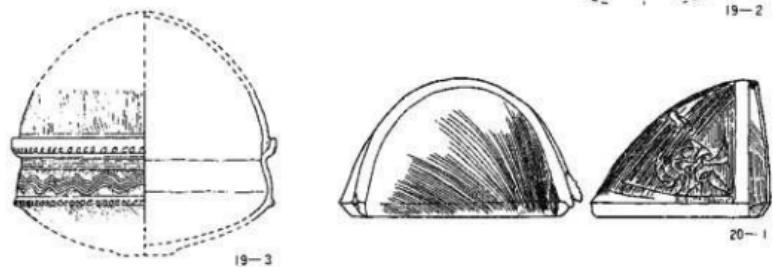
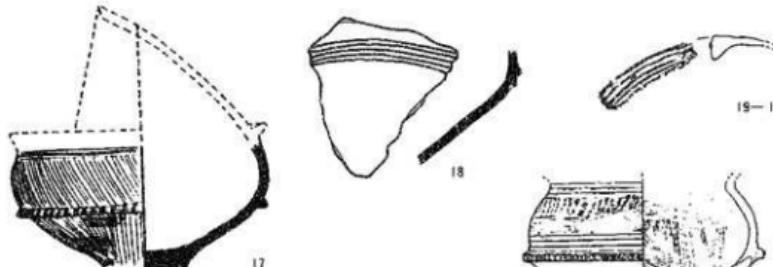
4 朝日 5 駿河



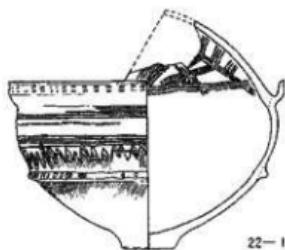
6 猪岡 7 高蔵 8 見晴台 10 理田 11 岡島 12 欠山



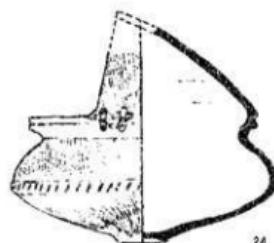
12 欠山 14 植荷下 15 福江 16 小山觀音



17 東日野 18 西ヶ広 19 山城 20 納所 21 堂ノ後



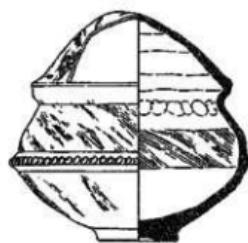
22-1



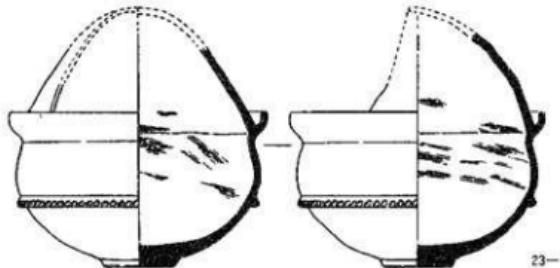
24



22-2



23-1



23-2

22 阿形 23 草山 24 宮ノ腰



27-1



27-2



27-3



27-4



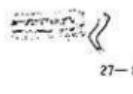
27-5



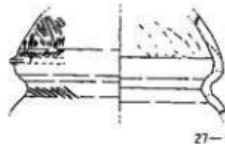
27-6



27-7



27-8



27-9



27-10



27-11



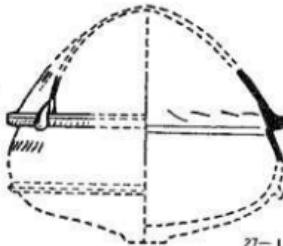
27-12



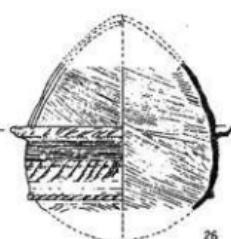
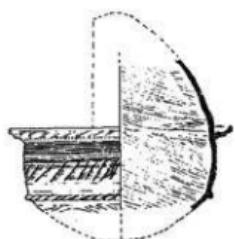
27-13



27-14

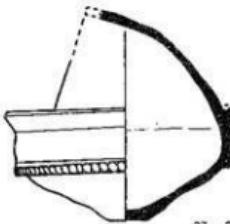
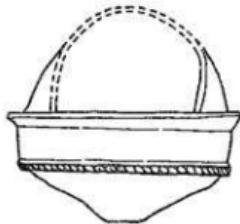


27-1

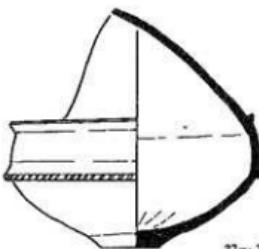


26

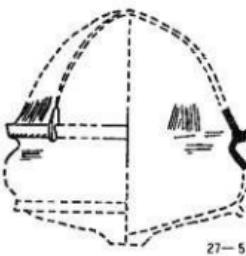
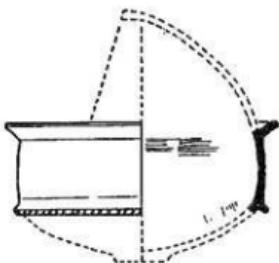
25 小芝 26 才良 27 藏持黑田



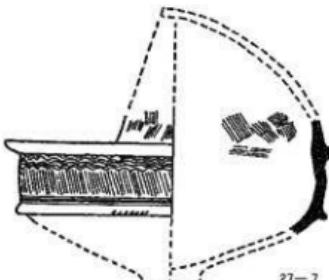
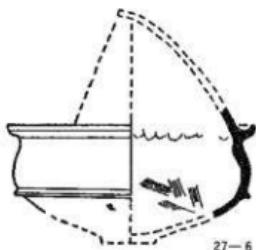
27-2



27-3

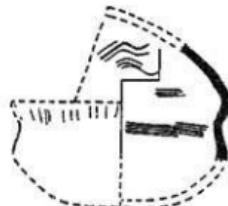
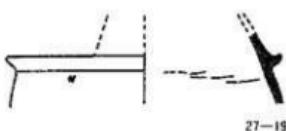
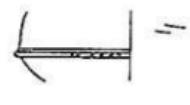
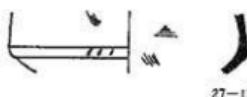
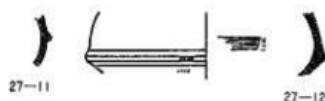
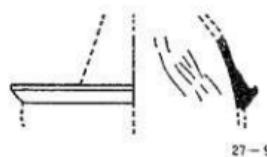
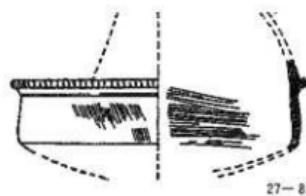


27-5

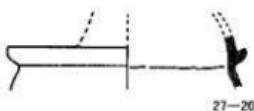


27-7

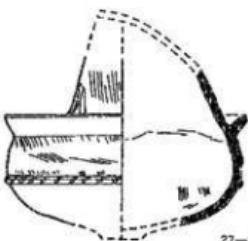
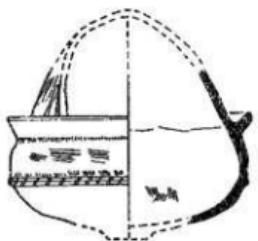
27 藏持黒田



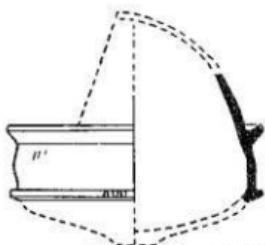
27-18



27 藏持黒田



27-24



27-25



27-26



27-27



27-28



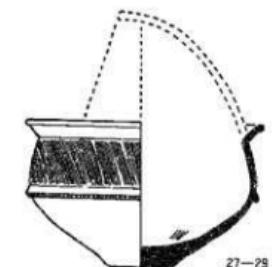
27-29



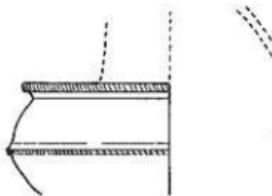
27-30



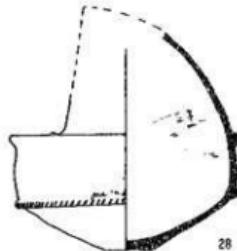
27-31



27-29

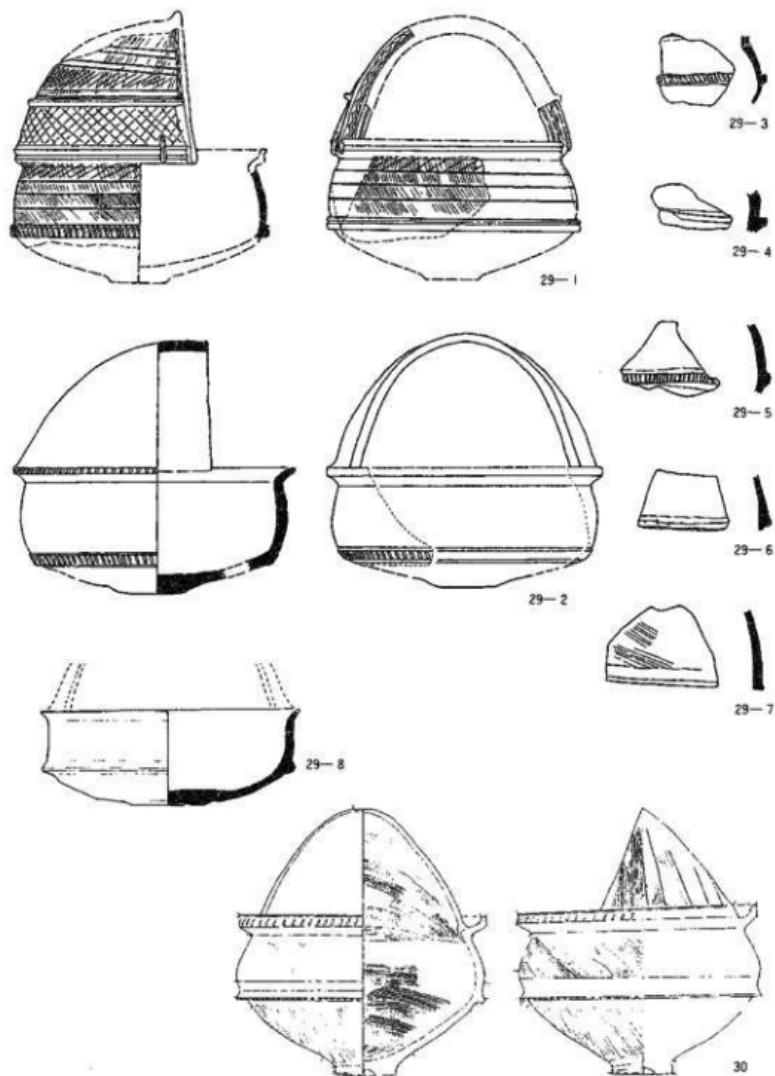


27-32

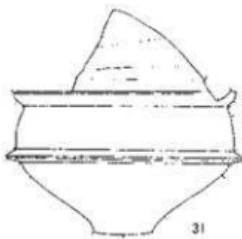
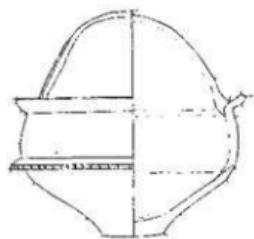


28

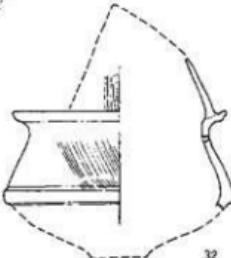
27 藏持黒田 28 白早稻



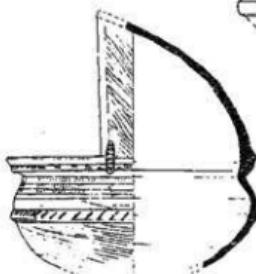
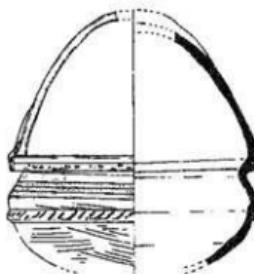
29 城尾敷 30 西B



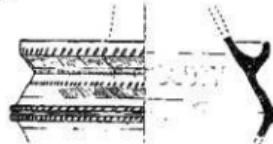
31



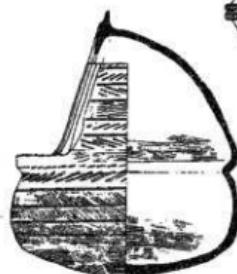
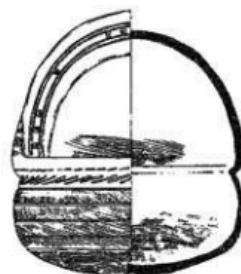
32



34-1



34-3

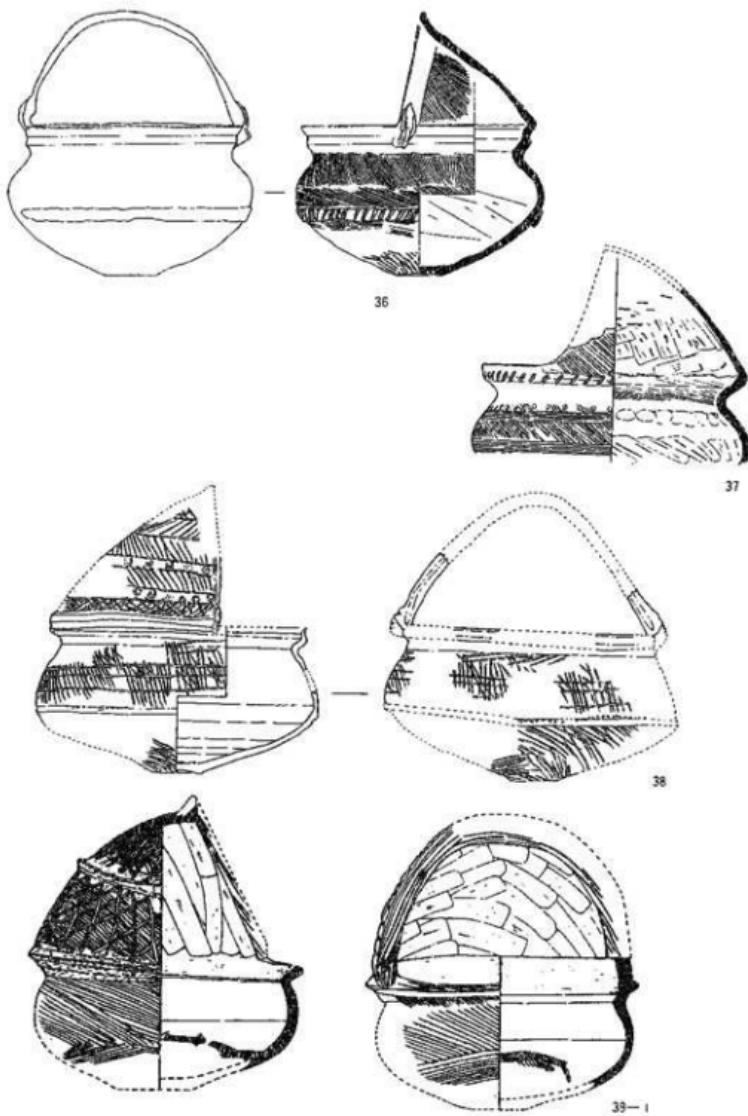


34-2

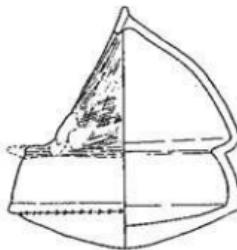
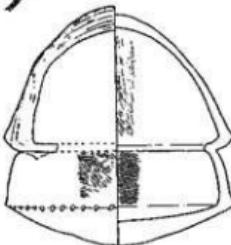
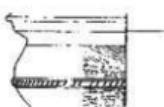
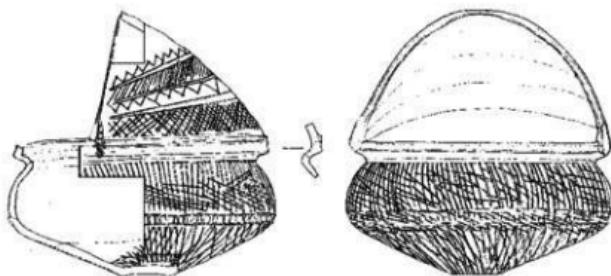
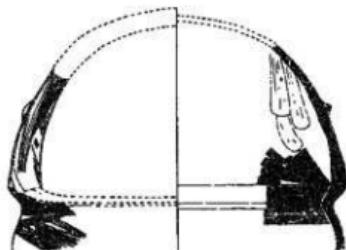


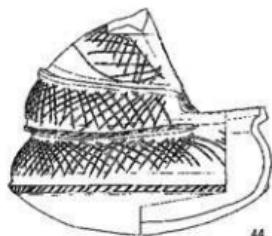
35

31 東町 32 奥出 34 白浜 35 大森

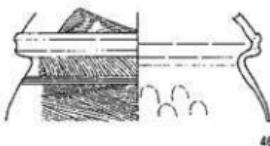


36 萩尾崎湖底 37 越前塗 38 宮司 39 東宮司

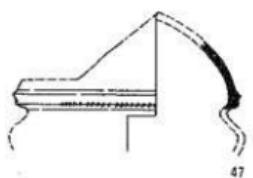




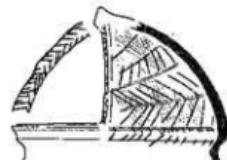
44



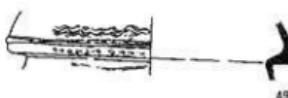
46



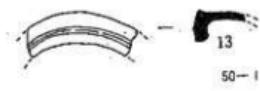
47



48



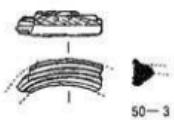
49



50-1



50-2



50-3



50-4



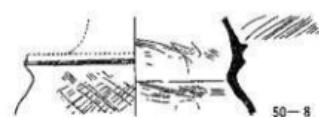
50-5



50-6



50-7

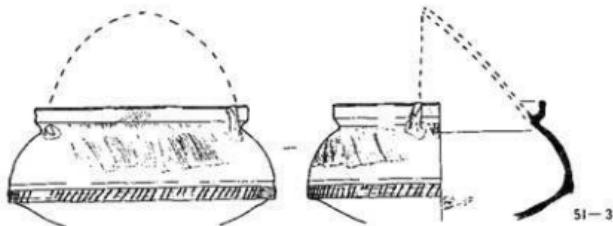
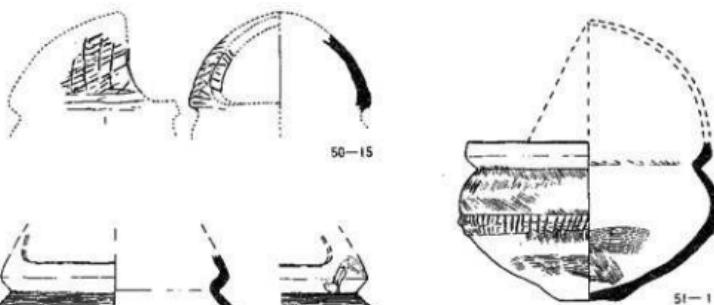
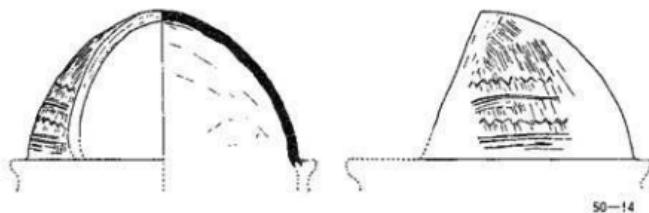


50-8

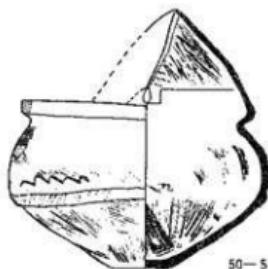
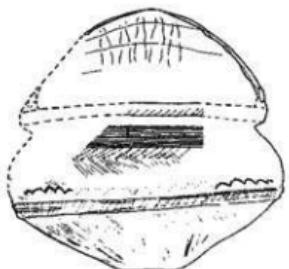
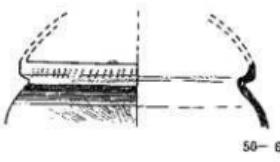
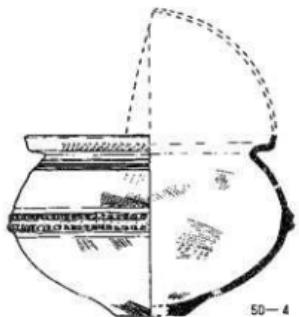


50-9

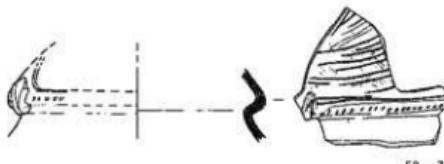
44 国友 46 法勝寺 47 黒田 48 妙乗寺 49 中沢 50 斗西



50 斗西 51 林・石田



50-5



50-7



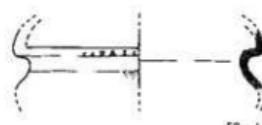
50-8



50-9



50-10



50-11

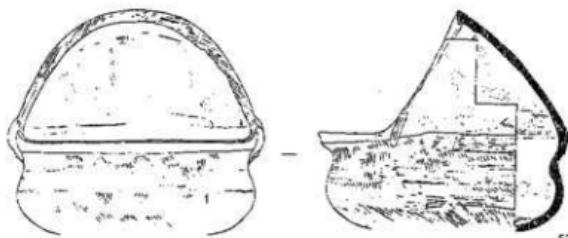


50-12

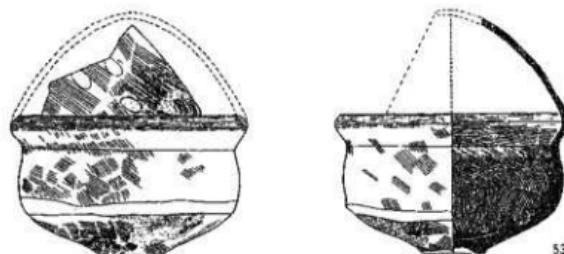


50-13

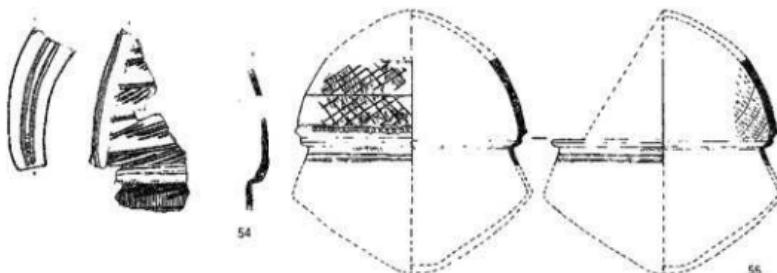
51 林・石田



52

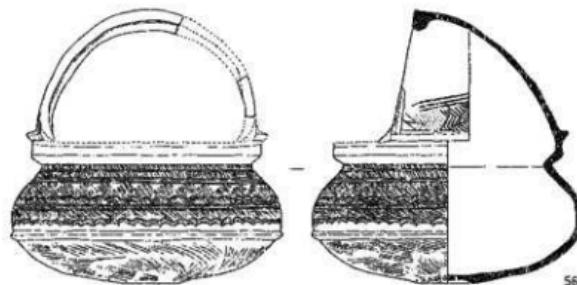


53



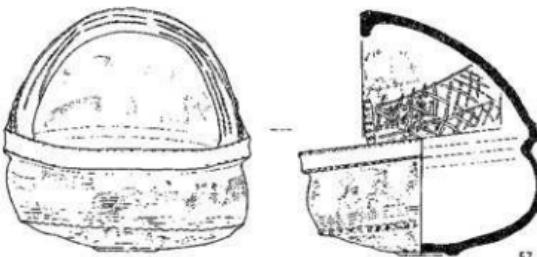
54

55

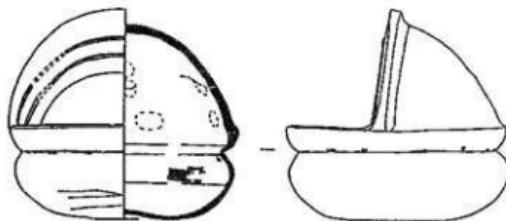


56

- 52 海ノ部
53 小比江
54 五之里
55 下巣子
56 新開



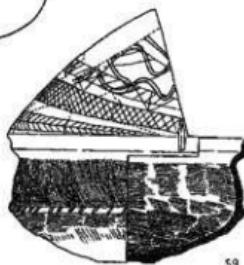
57



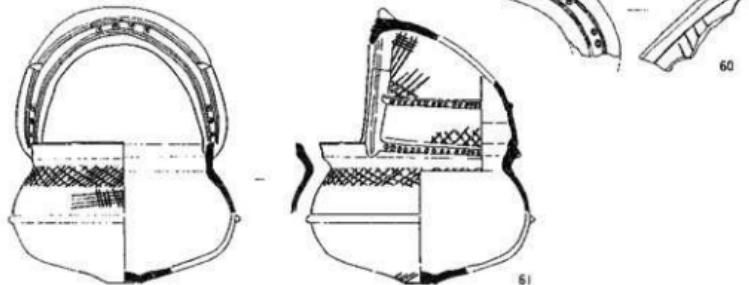
58-1



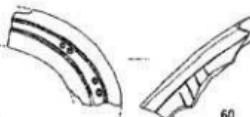
58-2



59

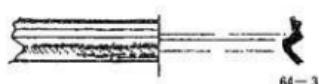
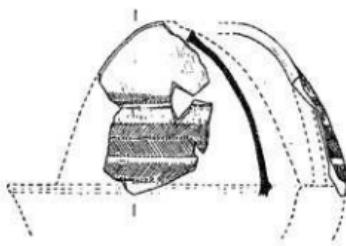
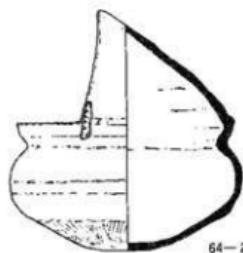
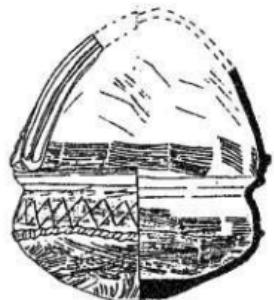
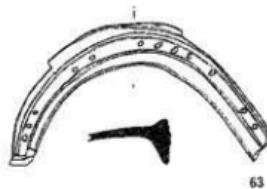
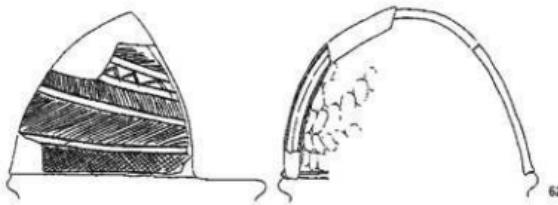


60

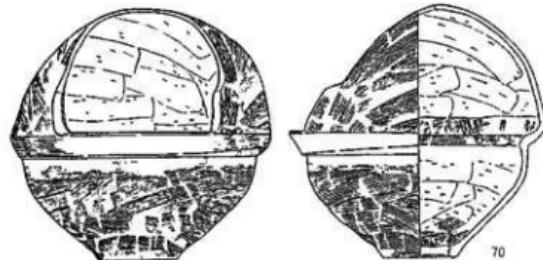
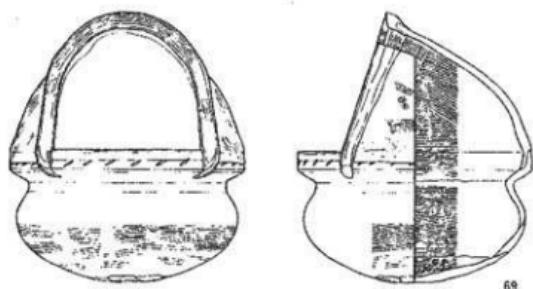
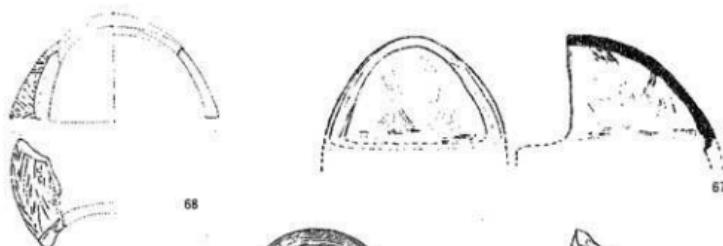
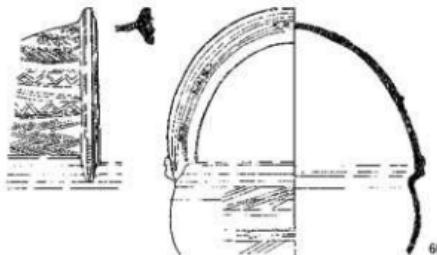


61

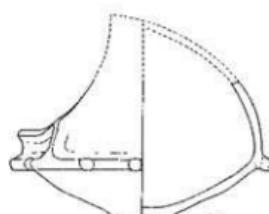
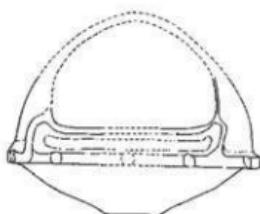
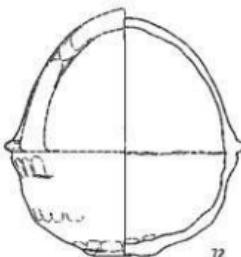
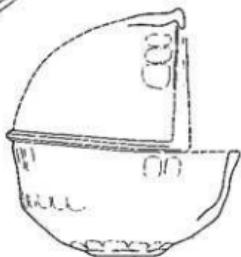
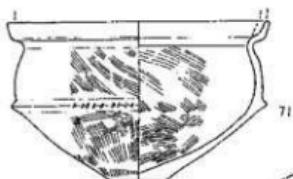
57 蔵ノ町 58 大門 59 服部 60 笠原南 61 欲賀西



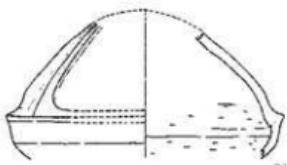
62 馬場 63 高野 64 銀藏 65 滋賀里



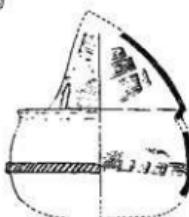
66 古武城
67 大境洞穴
68 半田新
69 魚鴨
70 杉谷内床ノ山



73



74



75

71 伊勢領 72 刈安野々宮 73 鹿頭上の出 74 漆町 75 上萬生田

研究紀要 第13号

1997

平成9年3月25日 印刷

平成9年3月31日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社